

---

# ネギ？ スプリングフィールド

浦波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギ？ スプリングフィールド

### 【Nコード】

N1284P

### 【作者名】

浦波

### 【あらすじ】

前作の「恋姫？むしろ三国志」の北郷一刀がネギまの世界に転生。悪逆非道のネギをお楽しみください。

## 1 最悪な目覚め（前書き）

この話はお試しです。

感想数や感想内容によっては連載を続けます。

なお、前作でもある「恋姫？むしろ三国志」はまだ連載中です。

出来ればそちらを見てからの方をお勧めします。

## 1 最悪な目覚め

俺はガキになった。

これだけでは意味が分からないだろうがその通りなんだ。

前回は恋姫の世界に北郷一刀の変わりに突然荒野で目が覚めて、今回は今さっき覚醒した。

少し前までは頭がぼんやりとして意識は朦朧としていたが、いきなり覚醒した。

目の前にはまさに田舎な村があり、山に囲まれてた。

少しの間、もしかして恋姫の世界に戻って来たか？ と思ったが、

やけに周りが大きいと疑問を感じたら自分が小さくなったことに気が付いた。

自分の手を見たら、あまりに小ささに悲鳴を上げた程だ。

まあ、いきなり自分の手が小さくなり、どこかからない所にいたら悲鳴位上げるだろう。

ようやく自分の体に慣れた頃、この体の持ち主の記憶が流れてきた。名前はネギ・スプリングフィールドらしい。

ネギ・スプリングフィールド？

ネギってあのネギま！ のネギ??

うっわ!! 最悪じゃん!

あの人生が死亡フラグのネギ・スプリングフィールド？

何だその理不尽は？

もしかして恋姫の世界で好き勝手やったせいかな？

でもあれは仕方ないだろう？

ああすることが自分にとって一番安全だったんだから。

それに、手紙にも好き勝手やって良いって書いてあったし、俺の責

任じゃ無いよね？

うん、そうさ！　きつとそうさ！

よし、現実逃避はこの位で状況確認だ。

まずコピー能力はまだあるか確認だ。

そこらの石を拾い、コピーしてみた。出来た。

よし、能力は無くなってない。

これで生活には困らない。

次に能力の確認だ。

もしかしたら能力に変化があるかも知れない。

結論としては変わりは無い

見ただけで石はコピー出来たし、

かと言って人間はコピー出来なかった。

まあ、良い。

この時代なら銃や戦車、戦闘機、ミサイル、核兵器だって見ただけでコピー出来る。

魔法使い相手でもこういった実弾攻撃は効くことは原作から分かっている。

あれ、俺最強？

いや、油断出来ない。

この世界は非常識の塊だ。

その最たる例は我らが父親、ナギ・スプリングフィールドだ。

あんな小学校中退みたいな単細胞野郎が英雄な世界だ。オマケに母親は大戦の原因と言われてる災厄の皇女。

何？　この最悪さ？　俺この世界で何かした？

生まれながらにして死亡フラグを背負う俺。

ネギ嫌いだったけど本人になると同情するわ。

そりゃあんな歪んだ性格にもなるよ。

希望が無いもん。

父親に縋りたくもなるわ。

俺は嫌だけど。

だってアイツ、どんな理由でも俺（息子）のこと捨てやがったし。

オマケに遺産も残して無いから生活は贅沢とは言えない。

というか親戚に養育費全部出させて情けなくは無いか？

もしかしてアイツ金持ってねえ？

だとしたら尚更最悪何だけど。

金もねえ、育てる気もねえ。

代わりに莫大な負の遺産はしっかり残す。なんてクズ共だ。

母親も父親もクズだ。

どうせアイツら、俺がいるせいで行動が取れにくいから捨てたんだろう。

じゃなきゃ意味分かんねえし。

子供を産んでも、その子供がロクな人生送れないことなんて自分達  
のして来た行動を見れば明白だし、

もしそれでも産みたかったら自分達で育てるだろう？

だって産むってことは自分達の子供にして来たことの責任を取らせ  
ることになるし、それでも子供が欲しかったら自分達で鍛えて守る  
のが親の務めだろう？

それが嫌だったら堕ろすか殺すべきだ。

子供にそんな人生を味あわせる位なら自分達で始末をつけるべきだ。  
それだと言うのにウチのクズ共は中途半端な覚悟で産み、親戚に預  
けて逃げるといふ最低っぷり。

まあ、ロクな人生歩いてねえし、ロクな教育受けてねえから人間と  
して終わってるんだろうな。

いい加減あのクズ共のことを考えてもしょうがない。

建設的なことを考えなくては。

とりあえず今は子供らしく振る舞って詳しい状況を確認するか。

## 2 子供の悲しさ(前書き)

2話目書いてみました。  
感想お願いします。



## 2 子供の悲しさ

アーニャマジウザい。

現実世界のツンデレほどムカつくものは無いわ。

マンガの世界だけど。

それにネカネも負ける劣らずウザい。

見た目こんなガキだから過保護になるのも分かるし、どこに行くのにも手を繋ぐのもまあ、仕方ないさ、俺は3歳のガキだからな。

それはガマン出来る。

寝るときも一緒に寝ようとするのも仕方ないと思うさ。

でも海外って子供は一人で寝るものじゃないのか？

アメリカはそうだけどイギリスは違うのか？

まあ、これは「今日から一人で寝る」と言っって何とかなった。

物凄い心配されたけど言いくるめた。

一番ウザいのはことあるごとに「アナタの父親は英雄だったのよ」  
って言いやがる。

こっちはもう聞きたく無いけど養って貰っている立場から「へー、  
そうだったんだ！」って喜んだフリをするしかない。

もし嫌われたりしたら生活がしにくい。

子供ってツライねえ。

コレが実の両親なら多少強く言えるけど、流石に親戚には強く言えない。

あのクス共が押し付けやがったせいだ。くたばっちまえ。

村人達もバカの一つ覚えみたいに「君の父親は英雄だったんだよ」、「父親のようになりなさい」とか、まだオウムのほうがマシなことを言えるぜ。

中にはマシなことを言う村人もいるけどやっぱりナギ・スプリングフィールドを信奉していやがる。

コイツら洗脳受けてるとしか思えない。

前の世界の北郷教の奴らみたいだ。

まさにナギ・スプリングフィールド教だ。

第三者目線で見ると宗教ってマジ怖い。

他国から見た北郷教ってこんな感じだったのか？

## 2 子供の悲しさ（後書き）

ツライ……。

3 作同時進行という無謀なことを選んでしまった。  
そろそろどれかに絞らなくては。

### 3 俺Tuee?

遂にアーニャから杖（初心者用）を貰った。

このためだけにツンデレのアーニャと遊んでたからな。  
もしくはなかったらコピーした銃で射殺してやるところだった。

さて、まずは初心者用の火点けの魔法からだ。

出ない。

1日頑張りましたが全く出ません。

たまにライターの失敗みたいなのが起るだけで全く点かない。  
てっきりネギだから直ぐ出来るようになるかと思ったが現実は厳しい。

アーニャがこれ見よがしにしてくるのが腹立たしい。

待てよ、これってコピー出来るのか？

分類的に生物じゃねえし、兵器類に分類されるだろう？

やってみよう。

杖を振って呪文を唱えるフリをしながらコピーする。

出来た。

簡単に出来た。

何だったんだろう？ 俺の1日の努力は。

オマケに俺の能力だから魔力も減らねえ。

今度こそ俺最強？

見ればあらゆる武器や兵器もコピー出来るし、今からの経験次第だ

けど魔法もコピー出来る量が増えれば戦力になるし、魔力も減らねえ。

ヤッベ、やっとオリ主っぽくなってきた。

でも正面から戦うのは俺らしく無いな…。

やっぱり戦う前に相手の戦力を削いどいて絶対勝てる環境下で戦うのが俺だろ？

## 4 ひたすらコピー

魔法がコピー出来ると分かった俺はひたすらコピーしまくった。

先ずはアーニャに魔法の矢を頼み込んで見せて貰った。

最初はやはり渋られたが、ちょっと焚き付けたら直ぐに見せてくれた。

見せた後に褒め称えたら上機嫌になって、頼んでも無いのに武装解除の魔法も見せてくれた。

ホント、単純で助かる。

アーニャはそれ以外の魔法はまだ知らないらしいのもういない。

アーニャをほっという次はネカネに近づく。

ネカネは攻撃系では無いので石化する前に白魔術を見せて貰った。

名目は、もしも仲間が出来た時や自分が傷ついた時のために見せて欲しい。

というものだった。

しかし、基本的なものしか見せてくれなかった。

それで仕方なく、精一杯目をウルウルしてお願いするという、もしも昔の俺がやったら間違いないと殴られる方法で縋った。

流石はネギのウルウル攻撃。

というべきか、ネカネは直ぐに最上位から最下位の回復や防御魔法を見せてくれた。

ネギ顔だけは最上級だもんなあ。

何か自分だけども力ついた。

次に、原作で強そうだったスタン爺さんに頼み込んだ。

この爺さんは比較的マトモだから、自分はナギ・スプリングフィードルの息子だからいずれは戦う必要があるから教えて欲しい。

という真つ当なことを言い、頼んだ。

真剣な顔で頼んだのが効いたのか、仕方なくだが教えてくれた。

主に身体強化の戦いの歌や炎系の攻撃魔法。

ありがたいことに認識障害や人避けの結界の張り方、記憶消去も教えてくれた。

これだと思う存分に訓練が出来る。

今まではあからさまなコピーは出来なかったから、自分自身の魔力を上げるための火点けの呪文や魔法の矢しか出来なかった。

しかし、この認識障害や結界を幾重にも掛ければ周りの魔法使いの目を誤魔化せる。

何かあっても記憶消去を幾重にも掛けて記憶喪失にしてやる。

他の村人にも聞いてみたけど大した収穫は無かった。

一応全属性の魔法の矢などの基本的な魔法はコピー出来たけど、どれも単体では威力不足だ。

一度に何万発も食らわせれば大抵の奴は殺せるだろうけどエヴァクラスでは分らない。

もっと威力が高い魔法を覚えたいけどこの村では無理だ。

：いや、待てよ。

あるじゃねえか？

とてつもなく威力が高い魔法を覚えるチャンスが。

## 5 今回真面目です（前書き）

今回の話はナギとアリカが物凄い酷い扱いを受けます。  
ファンの方は見ないことをオススメします。



## 5 今回真面目です

とうとう来た。

原作初めての死亡フラグ。

3歳にして死亡フラグが立つってどんな人生だよ。

この理不尽さが原作のネギの性格を生んだのか…。

精神崩壊しなかったネギを今では凄いと思うわ。

だって常人が見たら狂いそうな光景だぞ？

現在、俺は村から離れた丘の上で正に高みの見物をしている。

悪魔に喰われたり、殺されたり、石化される今の様子は正に地獄。

恋姫時代の経験が無かったらとても正気を保てないぞ。

そりゃあトラウマにもなるわ。

3歳にはキツすぎる。

何歳でもキツいと思うが。

出来るなら今までのコピーした能力を試したいが、そこまで自分に自信が無い俺はお父様の到着を待ちます。

悪魔が来ないように認識阻害と結界を百以上重ねて存在を無にしています。

ちなみに石化の呪文もコピーしました。

にしても何時来るんだよ？

もう村人いなくなりそうだぞ。

……もしかして来ない？

いや、有り得ないだろ？

だってこの場面は原作でかなり重要な場面だぞ？

ここでネギの行動指針が決まるんだから、ここで来なかったらネギま！ がもう終わりだよ？ 来るよね？

ていうか来てください。

今の俺じゃあヘルマンに勝てるか分からないんで。

初めてアナタ（父親）をお願いします。

一生に一度だけのお願いです。

このままじゃ本当に一度だけしか出来ないんで。

バーン！！

と途轍もなく大きい音が鳴り響いた。来た！

ようやく来やがった。

おーおー、すげーな破壊力。

確かにこれは悪魔が言った「どっちが化け物か分からんな」発言に全面的に賛同出来ます。

ちなみに俺的にはサウザントマスターの方が化け物と思います。なぜなら悪魔より厄介そうだからです。

まあ、俺の化け物観はいいとして。

雷の斧と雷の暴風いただきました。良かった。

これでやつと強力な魔法を覚えられた。

オマケにサウザントマスターバージョンなので威力はお墨付きです。

親父ありがとう！

多分もう言うことは一生無いだろうから今言っときます。

さーて、親父が悪魔片付けたからそろそろ降りるか。

俺は結界を解いて丘を降りる。

クズ（親父）も気付いたようでこっちに来る。

「お前がネギか？ 大きくなったなあ。」

何やら感慨深いのか嬉しそうだ。

クズが杖を渡す前に

「一つ、聞きたいことがあるサウザントマスター。」

真剣に言う俺にクズが俺を見る。

「なぜ俺を産んだ？」

ずっと聞きたかったことを言う。

クズは首を傾げる。

コイツマジでわからねえのか？

「お前が散々好き勝手やって来たツケは、お前が死んだという報告で俺が払うハメになるのは明白だろう？」

怒りを抑え言う。

ようやくクズも分かったのか気まずそうにする。

「教えてくれ、何故産んだ？ そして、わざわざ産んどいて何故捨てた？」

俺の言葉にクズは

「違う！ お前を捨てたりなんてしてない！ 預けただけだ！」

クズは反論する。

「では聞こう。俺を預けた理由を」

一応向こうの言い分も聞いとく。

「俺達夫婦には敵が多い、だからせめてお前は無事でいて欲しいから預けたんだ。」

クズは言う。

全く想定の範囲内のセリフにため息が出た。

中学生の方がもっとマトモな言い訳を出来るだろう。

「ほう、俺が心配だったから？ 違うな。それはお前達の誤魔化しに過ぎない。」

否定する俺。

「お前達は俺が邪魔だったんだよ。」

俺の答えを言う。

クズは

「違う！ お前を邪魔なんて思っていない！」

あくまで否定する。

「では聞こう。俺が産まれた時に一瞬でも思わなかったか？ コイ

ツがいるから今まで通りに好き勝手に動けない。」と

俺が聞くと少し詰まってクズは反論する。

「も、勿論だ！」

そこで俺は

「じゃあ聞くけど何で預ける？ 普通は考えるだろ？ 親戚に預ける

より自分達で守ろう。」と

自分達で育て、守り、鍛えようと。

それなのに預け、オマケに貴様等は死亡報告を出させて逃げやがった。

貴様等に恨みを残したものは当然息子である俺を恨む。

分かるか？ 何でお前等のツケを息子である俺が支払わなければいけない？」

大体、分かるだろ？ 今までの自分のしてきた行動を考えて見ろ。

お前は、いや、お前等は本来子供をつくってはいけない。

その子供は戦う宿命と親のしてきたツケを払わされる義務を負う。

俺のようにな。」

自分を指差す。

「毎日毎日村人から「お前は英雄になるんだ。偉大な父親のように」と言われる俺の気持ちを考えたことがあるか？

無いだろうな。あったらとてもじゃないが捨てられない。

大体さ。普通預けたのなら何らかを残すだろ？ それが死んだんなら遺産とか。

それをお前達何？ 何にも残さねえ。養育費も全部親戚任せ。お前

達生きてて恥ずかしく無いの？」  
大前提を聞く

そして村を見渡して

「こんなふうになるのは目に見えていたのに、お前達は何も残さなかった。

普通養育費位残すだろ？ それなのにお前達は何も残さず去った。預けという意味分かんない。本当に死んだんなら仕方ないと無理矢理納得するさ、俺の両親はロクデナシだったんだ。と。

それなのにお前生きてるし。

お前が生きてんなら妻のほうも生きてんだろ？ マジでお前達夫婦最低だよ。存在自体が迷惑だよ。

さらに悪いのは中途半端に助けになんて来るなよ。

何？ もしかして今までの未払い分を帳消しにでもしに来たの？  
なるわけねえだろ。

たかだか一回助けに来ただけで、俺の人生においてのお前の負債が帳消しになる訳無いだろ？

まずだったら捨てんなよ。マジお前達最悪だよ。

お前達、夫婦揃ってどんな神経してんの？」

俺はとりあえずの言いたいことを言う。

まだ一杯あるけど、ここでクズの意見を聞く。

「……確かに俺の行動は文句の言いようもねえ……」

が、アリカは、お前の母親は、お前を預けることは反対だった。俺が無理矢理言い聞かせたんだ。」

クズが母親について反論する。

「でも結局捨てたんだろ？」

ていうか本当に子供が大切だったらお前と別れても育てるだろう？  
お前の説明を聞くとつまり、最初は反対したけど最後は賛成したんだろ？やっぱり捨てたんじゃん。ていうか俺よりお前をとったんだろ？ 良かったねえ？」  
俺の反論に切り捨てられる。  
クズは何も言い返せない。

そこで俺は

「じゃあ、今までの未払い分として俺のお願い聞いてよ。」

「お願い？」

突然で混乱するクズ。

「あんたの知る全ての魔法を全力でやれ。」  
命令する。

一応コピーはしときたい。

「…？、あ、ああ。いいぜ。」

訳分からないうだが、クズは快諾した。

結果、コイツ使えねえ。

さっきの雷の暴風や斧の他には、魔法の矢と戦いの歌、武装解除位しかアンチヨコ無しでは使えないらしい。

更に今回はそのアンチヨコ自体を忘れたらしい。

マジコイツクズ。

まあ、戦いの歌などの身体強化は凄いレベルだったので良しとするか。

もうコイツいらないけど、最後に一つ。

「これが最後の願いだ。」

俺が言うと。

「おう！ 何だ？」

テンション高めで言うクズ。

役に立てたと思っっているのか嬉しそうだ。

コイツマジムカつく。

頭を深く下げて

「もう二度と俺の前に姿を見せないでください。」

敬語で言う当たりが本気である。

クズは目を見開く。

「アナタ達夫婦のことはもうどうでも良いんです。

ただ、俺の前に現れないでください。お願いします。

アナタ達が生存報告をしようが、このまま死んだことにしようが、俺にはどうでも良いんです。

お願いします。もう、アナタ達と関わりたく無いんです。」

頭を下げ続けた。

そしてしばらくしてクズは一言

「……分かった。」

とだけ言った。

俺は頭を上げて

「ありがとうございます。

それと奥様にお会いしたら伝言をお願いします。」「くたばれクズ」と。」

笑顔で言う。

クズは黙ったまま飛んで行った。

ちなみにネカネは原作通り生きてたけど、さっきコピーした雷の暴風でサウザントマスターの攻撃にたまたま巻き込まれたように見せ

かけて消し飛ばしました。

アイツ生きてると色々邪魔だからな。

その余波で石化したかなりの村人達が碎けて再生不可能になったけど無視だ。

仕方ない不慮の事故さ。

英雄が起こした事故としてね。



## 5. 5 ナギの絶望（前書き）

間違えて6話から投稿しちゃいました。  
先に読んだ方スイマセン。

## 5. 5 ナギの絶望

ナギサイド

俺は急いでいる。

ネギを預けた村が悪魔に襲われるという情報が入ったからだ。  
やはりネギの居場所がバレたか……。  
待っててくれネギ！  
必ず助ける！

悪魔を全部退治してネギを探す。

どこにもいない。

まさか悪魔に喰われたか？！

そう思った時、いきなり気配が現れた。

まさか増援か？！

そう思い気配の方向に杖を構えたが、見えた影は子供だった。  
3歳位の小さな少年。

ナギは直ぐにその子供が自分の息子であるネギだと分かった。  
何せ自分の子供の頃にソックリだったからだ。

ネギに近付き

「お前がネギか？ 大きくなったなあ」

とまだ赤ん坊だった頃のネギを思い出していた。  
しばらく感傷に浸りたかったが、自分が生存していることがバレたらヤバイので予定通りこの杖を渡して帰るつもりだった。  
しかし、

「一つ聞きたいことがある。サウザントマスター。」  
ネギの一言に遮られた。

ていうか親に向かって随分他人行儀だな。  
ま、仕方ないか、ネギにとっては初対面だもんな。

しかし、ネギの次の一言で俺の甘い考えは吹っ飛んだ。

「なぜ俺を産んだ？」

簡単な一言だがとても重い一言だった。

「へ？」

思わず聞き返す程の衝撃だった。

そして、ネギの次の言葉で理解させられた。

「お前が散々好き勝手やって来たツケはお前が死んだという報告で俺が払うハメになるのは明白だろう？」

反論すら許さないという雰囲気には吞まれ黙るしかなかった。  
確かに事実だ。

俺という存在を殺すことでネギに降りかかる被害を抑えようと思っ  
たが逆効果に終わったことはこの村を見れば明白だ。

俺は何も反論出来なかった。

しかし

「教えてくれ、何故産んだ？　そして、わざわざ産んどいて何故捨てた？」

この一言は黙れなかった。

「違う！　お前を捨てたりなんてしてない！　預けたただけだ！」  
しかし、ネギは信じていないようだった。

ネギは説明を求めた。

「俺達夫婦には敵が多いから、だからせめてお前だけは無事でいて欲しいから預けたんだ。」

俺の言葉にネギはやっぱりか。というふうな顔をした。

そして

「お前達は俺が邪魔だったんだよ。」  
その言葉にとっさに言い返せなかった

「では聞こう。俺が産まれた時に一瞬でも思わなかったか？ コイツがいるから今まで通りに好き勝手に動けない。」と」  
遂には自信を持って否定出来なくなった。  
事実、ネギが産まれた瞬間「これで好き勝手には動けなくなるな」という考えがよぎったのだから。

ネギは様々な思いを口にした。

俺達夫婦の無責任さ。見通しの甘さ。

などどれも正論で反論の余地さえない。

ある程度言い終わったのかネギは黙った。

俺の言い分を待っているのか？

だったら唯一、訂正出来ることを言おう。

「確かに俺の行動は文句の言いようもねえ。

が、アリカは、お前の母親はお前を預けることは反対だった。俺が無理矢理言い聞かせたんだ。」

しかしネギは

「でも結局捨てたんだろ？

ていうか本当に子供が大切だったらお前と別れても育てるだろ？

お前の説明を聞くとつまり、最初は反対したけど最後は賛成したんだろ？ やっぱり捨てたんじゃない。ていうか俺よりお前をとったんだろ？ 良かったねえ？」

との強烈な皮肉が帰って来た。

今になってなんでネギを自分達で育てなかったのかを思う。

確かに自分達といれば危険だが、実の我が子をまるで捨てるようにしたことは許されない。

昔の自分の情けなさを嘆いていたところに

「じゃあ、今までの未払い分として俺のお願い聞いてよ。」  
とのネギから初めてのお願いが出た。

「あんたの知る全ての魔法を全力でやれ。」  
との訳分かんないお願いだが、息子のお願いに嬉しくなり。  
リクエスト通りに全力で魔法を放った。

今日はアンチチョコが無いからロクな魔法を使えないが、今度会ったときは全部見せてやろう。そう思った。

「これが最後の願いだ。」  
ネギの言葉に

「おう！ 何だ？」  
テンションが上がったせいか大きい声が出た。  
しかし、ネギの

「もう二度と俺の前に姿を見せないでください。」  
その言葉で現実に戻った。

俺にとっては親子の復活かと思ったが、ネギにとっては最後の思い出だったらしい。

何か言い返そうと思ったが、ネギの頭を下げたままの「もう俺に関わらないでください」に。

ああ、もう無理なんだな。とはっきり思えた。  
俺は一言

「……分かった。」

としか言えなかった。

しかしネギはさらに

「ありがとうございます。」

それと奥様にお会いしたら伝言をお願いします。「くたばれクズ」と。」

母親であるアリカさえも拒絶した。

俺はその言葉に何も答えれず、飛んで帰った。

アリカ……もう、遅すぎたらしい。

俺達とネギの、息子との絆は、もう二度直らない。

## 6 とりあえず入学

クズが去った後、とりあえず俺は救助隊が来るのを待つ。

このスキに逃げることも出来るけど、追ってが来るだろうからやらない。

俺に似た背格好の奴を石化して砕いて、死んだように見せ掛けるといふ手法もあったけどこの村に俺と同じ位の背格好といえば女がいなかったので断念。

とりあえず今はコピーした食料で飢えを凌ぐ。

3日も経ってようやく来た。遅えよ。

原作のネギはよく生き残れたな。

メデイカルチェックを受けて現在一応病院です。  
主に精神面の治療らしい。

ここは一応怖がっておこうか？

やめよ面倒臭い。

もう親戚の家にいるわけじゃないし。

異常が無かったので現在軽い尋問中です。

何が起きたかを聞かれたけど

「化け物同士が殺し合った。」

と、言っておいた。

間違っ<sup>ナギ</sup>て無いよな？

悪魔と化け物が殺し合ったんだから。

しかし俺の説明に尋問官は困り果てた。

何せ3歳の子供だから強く問い詰めて泣かれたくない。

それに記憶を読もうにもナギ・スプリングフィールドの子供だから手荒なことは出来ない。

こういう時だけあのクズの名前は役に立つな。

結局、軽い精神錯乱と診断されて念のため1日入院。

退院手続きは全部魔法学校の校長がやってくれた。

楽でいいけどなんかなあ。

その後、とりあえずは校長の家に泊めて貰った。というか泊まらされた。

やはり3歳のガキが一人立ちは難しいか。

その夜に

「ネギ、魔法学校に入らんか？」

と魔法学校への入学を強く勧められた。

とりあえず行く気だがあんまり行く気は無いフリをして

「うーん、どうなかー。魔法学校より違う場所で鍛えたいし」

と返事を渋った。

しかし校長は

「しかし、鍛えるのなら基本を知るべきじゃ！」

と粘るのでそろそろかと思い、仕方なく

「うーん…。分かったよおじいちゃん。」

妥協するように言い、

「でもその代わりに図書館の禁書エリアを閲覧させて？」

と条件を言った。

「いや、それは難しいのう……。」

と言って悩む



すると俺は意見を翻し

「じゃあ入んない。」

と交渉打ち切りを迫る。

「いや、それは困るのじゃ。」

と言いつつ、校長が再交渉を申し出る。

「じゃあどうするの？ 条件を飲むの？」

と俺はまた条件を突きつける。

この交渉は始めから俺の勝ちが決まっている。

なぜなら俺は何か理由をこじつけて入学を断るという選択肢があるが、校長には無い。

校長は立場的に俺を入れないと色々ヤバイ。

だから最終的には条件を呑むしかない。

なかなか渋る校長に

「分かった。じゃあ禁書エリアに入る時はおじいちゃんと一緒にいう条件を付けるよ。でもこれ以上は譲歩しないよ？」

こちらからの譲歩を突きつけることでさらに選択肢を無くす。

結局、校長は駆け引きに敗れ

「分かった。ワシと一緒にということなら認める。」  
遂に折れる。

よし、勝った。

このためだけに魔法学校に入りたかったからな。

校長と一緒にただ見ればコピー出来るから問題無し。

さらに、俺は

「よし、今から行こう！」

と今から図書館に行くことを言う。

本の交換が出来ないようにする。

「い、今からか？」

校長は驚きと焦っている。

この爺、やはりヤバイ本を交換する気だったか。

「うん、今から見たいから行こう！」

校長の手を引っ張り無理矢理立たせる。

「明日じゃダメかう？」

校長は何とか引き伸ばしを図る。しかし

「ダメ、じゃないと入学しない」

と俺は駄々をこねる。

校長も粘ったが、結局は俺に押されて図書館に行く。

どうせ1日じゃ覚えられないとタカをくくっているらしいがそれは間違いだ。

図書館に入った俺は背表紙を見て、更に念のために触って図書館内を一周した。

その様子を見ていた校長に

「何をしとるんじゃ？」

と言われ、誤魔化すために

「本の配置を覚えているんだ。」

と嘘だが若干凄いことを言う。

「それで配置を覚えられるのか？」

校長がびっくりした顔で聞いてくる。

普通に考えても凄いことだもんな。

その後、一般エリアと禁書エリアを一周した俺は

「もういい。」

と言い、帰る。

すると校長は

「何？ 位置の確認だけでいいのか？」

と聞いてきた。

そりゃそうだ。

あんなに駄々をこねたのにただ位置の確認だけで良いなんて。

「うん、今日はもう遅いし、位置の確認だけでいいや。」

と言って結局帰った。

校長は不思議がったがとりあえず図書館に鍵をかけ、俺と一緒に帰った。

校長としては「まあいいか、禁書はやバイのは貸し出し中か紛失したことにすればいいのだから。」と思うのだった。

まさか思いもしなかっただろう。

触るだけで図書館内の本は全部コピー出来るなんて。

## 7 とりあえず休学

その後、魔法学校に入学して半年。

ネギは全教科満点の成績を取っていた。

まあ、テストでは答案用紙を事前にコピーしたり。

実技では先生の魔法をコピーしているので満点は当たり前か。

知識も図書館内の本を全部コピーしているので困らない。

この時知ったが、本など情報媒体はコピーすれば内容も頭に入るらしい。

物凄いチートになったものだ。

そうそう、長期休暇中に高畑が来ました。

コイツ嫌いだけど、後々職場の先輩になるので媚びを売っとく。

「ねえねえタカミチ。」

虫酸が走る声で高畑に話かける。

「うん、何だい？ ネギ君？」

高畑が聞き返す。

「タカミチの得意技って何？」

笑顔で聞く。

できればカン卦法が見たい。

高畑は笑顔でポケットに手をつ突っ込む。

そして目の前を何かが通る。

やっぱ居合い拳か。

出来れば剛殺居合い拳を見たいので。

「ん？ 何？ 何か通った？」

ねえタカミチ。もっと見えるように凄い威力でやってよ！」

と言って大木を指差す。

あの木を狙えという分かりやすいサインだ。

高畑は苦笑して大木に近付き剛殺居合い拳を放つ。

ズガンー！！

という凄まじい音がして大木が砕けた。

「うわー！ 凄い！ 凄い！

タカミチってすんごく強いんだね！」

と言ってお世辞を忘れない。

高畑は照れながら笑う。

そこでもう一丁。

「タカミチってさ。あの究極技法、カン卦法が使えるって本当？」  
聞く。驚く高畑。

そりゃそうだ、普通ガキはカン卦法なんて言葉さえ知らない。

「ネギ君、知っているのかい？」

高畑が聞いてくる。

「うん、タカミチって凄い有名人だからね！」

もう一度ヨイショする。

そしたら高畑もやる気になったのか集中し出した。

そして魔力と気を融合させてカン卦法を完成させた。

遅！

融合まで遅。

実戦ではもうちょい早いと思うけど、融合させる手間が掛かるから  
あんま実戦向きじゃないな。

それでも高畑には

「うわー！ すごーい！ 体がピカピカしてる！」

と言ってヨイショしとく。

高畑は満足したように日本に帰った。

俺、アイツに媚び売りまくりだな。

翌日、校長のもとに行く。

そこでいきなり

「おじいちゃん、僕五年位休学する。」

と宣言した。

校長は孫のいきなりの休学宣言に哑然とする。

「じゃ、そういうことで」

と帰ろうとする俺に

「ま、待つんじゃネギ！」

と止める校長。

やっぱ止められたか。

「何？ おじいちゃん？ 僕急ぐんだけど」

嫌そうな顔をして振り返る。

「まあまあ、待つんじゃネギ。とりあえず何で突然休学するんじゃない？」

理由を聞いてくる校長。

ま、当たり前か

「強くなるためだよ。お父さんのように」

思ってもないことを真顔で言う。

「それが何で休学に繋がるんじゃない？」

校長が聞く

「学校では実戦が学べないし。オマケに攻撃系の呪文を教えてくれない。

だから五年、魔法世界で修業してくる。」

そう宣言する。

「なぜ五年なんじゃ？」

校長は五年という長期が気になるらしい。

「五年経って、一年また学校に帰って来ればそっちの都合通り六年で卒業出来るでしょ？」

と学校の裏事情を言う。

校長は一瞬動揺したが即座に平静に戻って

「六年？ なんのことじゃ？」

と惚ける。

「知っているんだよ。メガロメセンブリアの爺さん達からの「英雄の子供を六年位で卒業させろ」という命令を」校長は今度こそ動揺を隠せない。

「な、何故ネギが知っているんじゃない？」

「僕だってバカじゃない。自分の立場は知っている。だからカマかけたんだよ。」  
と嘘をつく。

校長は一本取られた。と言わんばかりに苦笑する。

「僕はこれから大変な人生を送ると思う。だから、机上の空論じゃなくて実戦を経験したい。そして、人生の苦労を知るべきなんだ。この学校ではそれは学べない。だから自分を追い込む。

それで死んだら結局それまでの人生だったんだ。実際の戦場でも死ぬだろうしね」

校長は僅か3歳の子供がこんな過酷な人生を理解していることが大人として情けなかった。

そしてそれを否定出来ないから悔しかった。

「そうか…、しかし魔法世界は危険だ。僅か3歳の子供ではたちまち殺されてしまうぞ？」

心配からか脅す。

「大丈夫。このために禁書エリアに度々入って閲覧したんだ。ちゃんと最低限は鍛えた。今から見せるよ。」

そう言って校長室から出た。

校長を一面、何も無い草原に案内した。

そしてその草原で雷の斧を見せた。

地面を深く抉る。

その威力はサウザントマスター。ナギ・スプリングフィールドのものようだった。

実際そうなんだが。

「どう、おじいちゃん？ 少なくともお父さんにも負けない自信はあるよ？」

自慢気に話す。

校長は度肝抜かれたらしくしばらく呆然として

「分かった。休学を認めよう。」

諦めたように言う。ため息をついて

「やっぱりナギの子なんじゃなあ。」と昔を懐かしむ。  
こっちとしては狙い通りになったから別にいいけどね。

本当、名前だけは使える親父だな。



## 8 とりあえず復学

五年後。

え、時間経過が早い？

いや、普通に書いてたら五年間の内容なんて書き上がるのに一年位かかるから。

流石にそれは無理。

魔法世界で様々なことをした。

最早テンプレだが、代理人を立ててまほネットにも負けない北郷総合商会を作った。

商会は前回で経験済みだから比較的簡単だった。

何せ希少度が高い製品でも原価はタダだ。

元値の半分で売っても大きな利益になる。

初めは小さな小さな商店から始まった。

しかしネットに店舗を出してからその商品の豊富さと、有り得ない程の安さで瞬く間にとんでもない利益を叩き出した。

店舗拡大を続け、周りの店を吸収し続け、今では大規模総合商社に発展した。

さらに、政界にも進出して莫大な資金と宣伝力で何人もの有力議員の後ろ立てになり、自分達でも候補者を立候補させたりした。

そしてメガロメセンブリアの老人達にも献金など多大な政治的な協力をしているため、商社は多大な影響力を持つようになった。

俺がその商社のトップだとは知らないが、トップと仲が良いと思わ  
せているので迂闊に手は出せない状況にした。  
何せ、自分達のパトロンと仲が良い子供を好き勝手に戦場にでも送  
り込めば自分達の政治生命が危ういんだからな。  
後任には俺の息がかかった奴らが大勢いる。  
いずれは老人達には定年を迎えて貰わなくてはな。  
あんまり老人は働かせるものではないからねw

魔法の知識についても順調だ。  
今や覚えた数は千を超える。

ほんとのサウザントマスターになっちまったな。  
まあ、覚えたけど大体はロクに使えない魔法ばかりだ。  
いつも使うのは10種類も無い。

結局はあのクズと同じか…。  
そろそろ五年経つから戻るか。  
あのストレスマッハな環境に。

魔法学校に戻って来ました。

とりあえず校長にご挨拶。

扉をノックして入る。

「失礼します」

久しぶりに見る校長。

……何にも変わってねえな。

「お久しぶりです。校長先生。お代わり無さそうで安心しました。」  
俺が話すと校長は呆然としている。

「……お前、ネギか……？」  
理解に時間がかかったようで。

そりゃそうか、今の俺の見た目は二十代。

ムカつくことだがサウザントマスターにソックリだ。

魔法世界では顔を変えて誤魔化していたが。

ボン！ と煙が出て、煙が消えたらそこには十歳位の少年がいた。

「そうだよおじいちゃん。ネギ・スプリングフィールドだよ。」

変装魔法を解いて言う。

「ネギ：大きくなったのう。」

最初はデカすぎると思ったが

苦笑する校長。

「それにしても何で変身魔法などしておったのじゃ？」

校長が最もなことを聞いてきたので

「アッチの世界では子供の格好じゃナメられるからね。

つい癖で変装したまま来ちゃったよ」

と笑いながら答える。

本当は子供の格好では校長室まで行くのに警備が面倒だったので、

大人の姿で客と言って入りたかったただけだが。

校長はなる程。と何度も頷いた。

「それで、ネギ。約束通り復学するのか？」

校長が確認として聞いてきたので

「うん、しばらくは平和な生活を楽しむよ。卒業までは。」

卒業までという現実的な答えに校長は苦笑するだけだ。

事実そうなるだろうから。

明日から復学することになった。

家は校長が自分の家を貸そうか？ と提案して来たが却下。

家なんか幾らでもコピー出来るので少し離れた山を切り開いて家を

建てた。

あんまり大きくないけど一人暮らしには丁度良い。

さて、寝るか。

明日からストレスの日々だ。  
爆発しなきゃ良いけど。

## 9 ストレスマツハ

五年振りの学校は極めて居心地が悪いです。

そりゃあ五年振りの同級生に会って、何て話しかければいいかわからないので半ば阻害されるのは仕方ないとして。

中には露骨に毛嫌いしてくる奴らもいやがる。

どうやら今までトップクラスに入っていたのに、突然復学して来た野郎にランクを下げられたのが気に食わないようだ。

気持ちは分かるのだがそこまで露骨に迫害しなくてもいいだろ？

本人を前にして大声で陰口？ 叩いたり、授業中に実技でいつも事故に見せかけて魔法の矢を打ち込んで来たり、薬学の実習でナベの中に訳分かんないもの放り込んで来たり。

流石にイラつくからちよつと復讐だ。

イジメの首謀者の実家に放火してやった。

こういう時は本人を痛めつけるより、大切な人を痛めつけるほうが効くもんだ。

あーあ、実家の報告を聞いて泣いちゃった。

そりゃそうか、両親焼け死んだもんね。

不運にも。

さあて、どうする？

頼るべき家も両親も無くなっちゃった。

ほおー、そう来るか。

自分の不幸のイライラを解消したいためか俺を呼び出しやがった。

オマケに今回は本気らしく、誰にも見つからない所に一人でいやがった。

どうやら殺す気らしい。

恐いねえ。

逆恨みって。

「お前が来てから俺の人生滅茶苦茶だよ!!」

どうしてくれるんだ!？」

という第三者が聞いたら完全に逆恨みだが、事実、間違っていないことを言われた。

「さあ？」

と嘲笑いながら答える。

ブチ切れたのか魔法の矢を20本も撃ち込んできやがった。

どうやら殺す気で撃ったらしい。

俺のシールドに弾かれたけど。

撃ったヤツは信じられないように固まる。

確かに、普通の魔法学校の生徒ならシールドごと体を突き抜けるだろう威力だった。

しかし、俺はあのクズのシールドを幾重にも張っているのでこの程度何とも無い。

例えるなら、戦車に向かって家庭用の水鉄砲で立ち向かうのと同じでいくら撃っても意味ない。

「終わり？　じゃあ俺も撃つよ？」

と周囲に結界を張って外と隔離する。

やっとヤバいことに気付いたのか、必死に許しを乞う。

「頼む、許してくれ!　俺はちょっとヤケになってただけなんだ!　両親が死んでその鬱憤を押し付けたかっただけなんだ!　許してくれ!」

と無様にも跪いて涙を流す。

無視してそいつの腹に魔法の矢を10本撃ち込んで腹をえぐる。

「ギャーーーーーーーー！！！！」

と叫びながらのた打ち回る。

そして俺は近づき、言う。

「どうでも良いよ。ただお前が嫌いなだけだし。

：それに、お前に言っときたいことがあるんだ。」

耳元で囁く。

「俺がお前の実家に火を点けたんだ。」

と笑顔で言った瞬間、そいつの目は血走り。

「ッ畜生！！ 殺してやる！！

絶対エ！！ 殺してやる、ネギ・スプリングフィールドオオ！！！！」  
と叫びながら血を吐く。

俺は無言でその顔に向かって魔法の矢を放つ。

顔が吹っ飛んで首無し死体になった。

その後、その首無し死体を焼いて埋めた。

さあて、今日は久々に良い日だったな！

ストレスも少し解消出来たし。

今日はゆっくり眠れそうだ。

そう笑顔で言い。ネギは寝た。

その寝顔はとても安らかで、ついさっき人を殺したように見えなかった。

## 10 卒業

卒業。

ストレスとの別れ。そして新しいストレスとの出会い。

「卒業証賞授与、この七年間よく頑張ってきた。だがこれからの修行が本番だ。気を抜くでないぞ」

校長がありがたい言葉を言っている。

ていうか俺、七年も頑張ってたねえぞ。

精々一年半くらいか？

まあ、ストレスと戦って頑張ってたけどな。

あの行方不明事件以来、俺をイジめる者はいなくなり楽になったが、今度は教師達の番だった。

「五年間のブランクがあるのにトップの成績を取っているのは流石英雄の息子」

と俺をもてはやす。

それだけなら良いのだが

その後に必ずと言ってもいいほど

「お父さんのような英雄になりなさい」や

「マギステル・マギになりなさい」

とか必ず余計な一言を言いやがる。

更に、あからさまな差別をして俺に答えさせようとしたり、実技では必ず最後に俺にやらせて、出来たらまた「流石英雄の息子」だよ。そのたびに周りの生徒が微妙な顔をするから俺は教師に愛想笑いをしか無い。

おかげで知り合いすら作れなかった。  
嫌な学生生活だったよ。



「主席卒業、アンナ・ユーエウナ・ココロウア君!!」

「はい!」

お、やっと卒業証書授与が始まったか。

原作と違って、俺はほとんど学校にいなかったから流石に主席は無理だった。

まあ、普通に考えれば卒業も無理なんだけどね。

「ネギ・スプリングフィールド君!!」

「はい」俺も呼ばれたので行く。

卒業式も終わった。

さて、何が出るかな?

まあ、何が出るのかは分かっているけどね。

……やっぱり日本で教師か。

意味無いけど一応校長に抗議といくか。

校長室に入り

「おじいちゃん。これ何?」

といきなり卒業証書を机に叩きつける。

「ほう、先生か…」

と言うだけ

「何かあると思っていたけどコレは無いだろう?

ていうか、日本どころか、世界の労働基準法を真っ向から否定してるよね?」

と知らなかったように聞く。

「しかし、卒業証書にそう書いてあるなら決まったことじゃ立派な魔法使いになるためには頑張って修行してくるしかないのう」と原作と同じことで返して来やがったこの爺。

「安心せい。修行先の学園長はワシの友人じゃからの、ま、頑張るなさい」

原作ではコレでネギが「はい！」で終わったが俺は終わらせない。

「おじいちゃんの友人ってことはその人も魔法使いなんだよね？」

と聞くと爺は

「うむ、そうじゃが。それがどうかしたか？」

と聞いてきた。

「なら信用出来ないよ。

魔法使いはみんな頭がイカレているからね。」

と初めて本音で話した。

「…イカレてる…:…?」

爺は不思議そうに聞き返した。

「だって魔法なんて便利なものが普段からあると常識が通じる訳が無い。

今のこの状況のようにね。」

爺は首を傾げる。

「僕はさっきから正論を話しているのに、おじいちゃんはまるで自分の言うことこそ正しいかのように話している。」

と常識を話した。

爺は

「う……。」

と黙る。

「どうせ行ったら修行内容とは関係無いこととかさせる気だよ。多分その場のノリで。」

予想というより予言を言う。

爺も思い当たるのか

「確かに…。」

と一言呟く。

「あやつは信頼は出来ても信用は出来ない奴じゃからの…。」

ヒゲを撫でながら昔のことを思い出しているのか遠い目をする。

「だったらコレは何とかならない？　いくら何でもコレは有り得ないよ。」

と形だけ撤回を求める。

「それは無理じゃよネギ。これは既に決まったことじゃから。既に先方には連絡済みじゃ。」

と本音を漏らす爺。

「やっぱり決まっていたことなんだね？」

俺が苦虫を噛み潰すような顔をする。

校長は憐れみを込めた目で俺を見る。

「じゃあ、コレは回避出来ないものと百歩譲って受け入れるとして、先ず赴任前に慣れておきたいから早めに行きたいんだけど。」  
と譲歩案を出す。

「早めに？」

「うん、赴任のひと月前位なら日本語も一通り覚えられと思うから、それ位に行って宿泊設備や学園内を見て回りたいんだ。」  
マトモなことを言う。

これ位は良いだろう？

俺のお願いに爺は

「分かった。先方には連絡しておく。」  
と了承。

よし、とうとう祖国日本に帰れる。

爺には一月前に行くと言ったが、今すぐ行く。

しばらくは日本で遊び呆けよう。

来年から厳しい現実が待っているんだから。

## 10. 5 学園長の悩み

学園長サイド

「ふーむ……。」

広い学園長室に声が響く。

後ろには高畑が控え無言だ。

学園長は目の前の書類を眺めたまま

「魔法世界で五年間単身修行とはな……。」

苦笑しながら言う。

高畑も若干苦笑い。

「流石ナギの息子と言うべきじゃな。」

と感心しながら頷く。

高畑も賛同らしく頷く。

「しかし、よく生きて戻って来れたのう。3歳で魔法世界に単身行くなど自殺行為以外に無いからのう。」

高畑が答える。

「ええ、僕が見た時はネギ君は普通の子供でしたからね。僕が帰国して間もなく魔法世界に行ったと聞いて驚きましたよ。」

その時を思い出して苦笑する。

「無事帰って来て僅か一年で魔法学校も卒業か…。あきらかに上からの圧力があつたんじゃない」

学園長は友人でもある校長に同情するように目を伏せる。

高畑も経験があるからか目を伏せる。

しばらくして高畑が

「でもどうします？ネギ君には実戦を経験させるためにエヴァを当

てる計画ですが既にネギ君は実戦を経験しているでしょうし。」  
学園長も思っていたのかどうでしょうか悩む。

「う〜〜む。……やはり計画通りエヴァと戦わせよう。」  
学園長は計画の変更無しを伝える。

「ネギ君が現在どこまで強いのか気になるし、エヴァと戦わせるのも良い経験にもなるじやろう。」

高畑も納得したのか頷く。

「しかし、予定よりひと月早く来るとはのう。」  
話題をかえる。

「ええ、学園内に慣れたいということらしいですね。良いことだと思いますが？」

高畑は学園長が悩んでいるように見えたので聞く。

「いや、そのこと自体は良いのじゃが……。問題は宿泊設備じゃ。」

「予定通りいきなり生徒と泊まらせるのはどうかのう？」

高畑はなる程。と納得する。

「だったら僕の部屋に泊めますよ。ネギ君とは顔見知りですし、不自然では無いでしょう。」

高畑の意見に学園長も納得して

「分かった。頼むぞ高畑君」  
と頼む。

「しかし、一番問題なのはエヴァにどう説明するなじゃな。」  
と学園長が笑いながら聞く。

高畑も苦笑する。

なんせネギ君は多分実戦を経験しているだろうからそこそこ強いと思うからエヴァが上手く手加減してくれば良いが……。

## 11 満喫

ただ今旅館に泊まり露天風呂を満喫中。

いやぁいいねえ温泉は。

恋姫時代にも作らせようとしたけど、どこを掘れば温泉が出るのか分からなかったから断念したんだよね。

イギリスではシャワーが多いから風呂に入った気がなかったし。やっぱり良いねえ露天風呂は。

自分がつくづく日本人なんだなぁと実感した日々でした。

いや、別にただ遊んでいる訳では無いんだよ？

一応工作はしているし。

先ず俺は京都に行った。

ここの関西呪術協会を見てみたかった。

それにあの碇ゲンドウ似の長の顔を拝んでおきたかった。

呪術協会の結界は簡単に侵入出来た。

原作で随分自信満々に言うからさぞや凄い結界かと思ったたら簡単に侵入出来た。

コレならフェイトが軽々と侵入出来たのも頷けるな。と納得してから境内に入った。

長の執務室に侵入し話しかける。

「お初にお目にかかります」

後ろから話かけたせい、振り向き様にいきなり切りかかって来た。フードを深々と被っていたせいかな？

その刀をシールドでガードする。

「失礼しました。ノックも無しに部屋に入るといふ無礼、お許しください。」

頭を下げる。

長は困惑しように頭を傾げる。

「お前は誰だ？」

フードを取った。

その姿を見て長は目を見開く。

それはそうだろう、今の俺の姿は二十代。

つまりナギ・スプリングフィールドにソックリなのだから。

「ナ、ナギ？」

長は信じられないものを見るように話しかける。

「いえ、私はナギ・スプリングフィールドが息子。ネギ・スプリングフィールドです。」

頭を下げる。

「ネギ君？……で、でも君はまだ九歳の筈。」

「そうです。私はまだ九歳。この姿は変身魔法です。」

ポン！ と煙が上がり子供が現れた。

「この姿が本来の姿です。あの格好のほうが何かと都合が良いのでガキの格好じゃ夜中に出歩くと即補導されちゃう。」

長も納得したのか

「成る程ね。」

しかし、何の用かな？ 君はまだ日本にいる予定では無いが？」

「はい、確かに私はまだ日本に教師として着任していませんが、事前に準備をしておきたかったのです。」

「準備？」

「はい、先ずはこの日本はどのような場所なのか知るために、そしてこの日本の魔法においての二大派閥の一つ、関西呪術協会の長で

あるあなたにご挨拶をと思ひまして。」  
頭を下げる。

「これはご丁寧に。」  
長も頭を下げる。

普通、組織の長は簡単に頭を下げないと思うが？  
やっぱりコイツ原作通り甘いのか？

「それで、今日はただ挨拶に来ただけなのかな？」  
長はもうフランクに話す。

「いえ、最初はただご挨拶に伺おうと思っていましたが、何やら良くない噂を耳にしまして。」

「良くない噂？」

「はい、噂によると長は関西呪術協会を掌握出来ていないとのこと  
で」

長は眉間にシワをよせる。

「失礼ながら、協会内を調べた所あなたはお飾りだと言う者が多い  
ですね。それに今の反応を見るに真実のようで。」

頭を下げながら反応を伺う。

さて、シラを切るか？ それともどうする？

「フー……。どうやらバレたようだね。」

と笑う長。

コイツ自分が無能だと認めやがった。

確かに無能らしいな。簡単に認めるなど。

「それで、その噂を聞いてネギ君はどうしたいのかな？」

「はい、私は組織掌握に少しでも力になればらと。」

「力？」

「はい、こちらの写真をご覧ください。」

天ヶ崎千草、犬神小太郎、月詠の三人の写真だ。

「この者達があなたに対して謀反を起こそうと画策しています。」



「謀反!？」

流石の長も大きく反応した。

「はい、この者達。」

特に、天ヶ崎千草は西洋魔法使いを恨み、その西洋魔法使い達の本拠地である関東魔法協会と仲良くしているあなたがとても気に食わないらしく、激しく憎悪しています。」

「……………」

長も思い当たりがあるのか黙る。

「以上で私の話は終わりです。」

頭を下げる。

長も気が付いたのか

「あ、ああ。ありがとうネギ君。君の報告。感謝するよ。」

頭を下げ感謝の意を示す。

「では、失礼します……あ、そうそう。忘れていました。」

長に振り返り

「私がここに来たことは御内密に。もちろん関東魔法協会の長にも。」

「

「お義父さんにもかい？」

長が首を傾げる。

「はい、私があなた様とお会いしたことが知れると双方にもご迷惑をおかけします。私の名はどちらの組織にも衝撃を与えてしまうので。」

頭を下げてお願いする。

長も納得したのか

「わかりました。誰にも話しません。」

「ありがとうございます。」

ああそうそう、余計ついでにもう一つ。

境内の結界ですが……あまり過信しない方が良いかと。私でも簡単に入れたのですから。強化が必要かと。」

長は苦笑いして

「あ、ありがとう。注進、感謝するよ。」  
と言うだけ。

本当に分かってんのかよ。

フリー。やっと終わった。

修学旅行事件を早めに潰しておきたいからな。

一応警告位はしといた。

あれでまだ誘拐事件が起きれば本当の無能だな。

まあ、そんなときゃそんな時か。

それに、もし成功しなくても借りは出来たし、成功したらもっと大きな借りが出来る。

俺に損は無い。

さーて、まだまだ休暇だ。

遊び呆けよう。

## 12 訪問（前書き）

今回の話に法律について出て来ますが、作者の「多分こうだろう。」  
という認識で書いてます。

おかしい所があるかも知れませんが、この世界ではこうなんだ。と  
いう認識でお願いします。

## 12 訪問

学園長の頭をリアルで見ました。気持ち悪かった。

いきなりこんな冒頭はスマナイが、本当に気持ち悪かったんだよ。奇形ってレベルじゃねえぞ！

時代が時代なら神か悪魔に祭られそうだな。

一時間前

しばらく日本で遊び呆けてようやく学園に訪問。

休みなので人はほとんどいないが感想。

デカいって言うレベルじゃねえぞ。

駅から校門までが距離ありすぎ。

これじゃあ始業時間ギリギリまで寝てギリギリ登校が出来ない。

俺の得意技が通じ無いとは、何という挑戦。

まさかこの俺に早起きをしろと？

小中と何時も時間ギリギリに登校して少しでも惰眠を貪ってた俺に何という拷問！

まあ、おふざけはこの位で。

そろそろ行くか。

しかし案内役の高畑遅え。

事前に手紙で日時は知らせておいたのに遅刻とは。  
ナメてんのか？

お、やっと来やがった。

15分遅れとかマジコイツクス。

オマケにダラダラとゆっくり歩いてこっちに来やがる。まるで焦って無いな。

常識から言ってありえねえ。

この学園の結界のせいかな？

だったらこの学園に一秒も居たくない。こんな洗脳効果がある結界内から今すぐ帰りたい。

あーあ面倒臭い。

「久しぶりだね、ネギ君。」

遅れたクセに謝りもしねえ。

「ええ、お久しぶりですね。本来なら15分前位に再開している筈ですがね？」

軽い皮肉を言う。本当ならもっと直接的に言いたい。

「う：スマナイね。少し用事が立て込んで。」

「そうですか：事前連絡は意味が無かったらしいですね。」

「ははは……。」

高畑は笑うだけ。

コイツ今すぐ殺したい。

高畑の案内で学園長室に向かう。

あんなことがあったせいか互いに無言。

高畑が痺れを切らしたのか

「それにしても大きくなったね、ネギ君。」

社交辞令的なことを聞いてきた。

「はい、あれから六年経ちましたからね。逆に大きくなっていないかったらヤバイですけどね。」

まだ怒りが収まっていないため皮肉を言う。

「ま、まあそうだよね。」

高畑も自覚はあるのか苦笑する。

また無言が続く。

しかし無駄に広い校内のせいでまだ目的地に着かないので無言で歩く。

「し、しかしネギ君は凄いねえ。」

3歳で魔法世界に単身、修行に行って無事に帰って来るなんて高畑がおべっかを使い会話を進めようと頑張る。

「ええ、それなりに充実した五年でした。」

「そうかい。大変だったろうね。」

「いえ、なかなか楽しめましたし、良い経験になりました。」  
とりあえず和やかな雰囲気になった。

ようやく学園長室に到着。

ていうかなんで中等部の一番奥にあるんだよ。

普通、学園長室なら大学部か職員エリアあたりに建てるだろう？  
なんで女子中等部？

まさか孫がいるから？

もしかして木乃香が初等部にいた時は初等部にあったのか？  
うわ、マジ引くわ。

見た目エイリアンで中身ロリコン。

ダメだわコイツ。

話は冒頭に戻る。

「フォ、フォ、フォ。」

よく来たのう。ネギ・スプリングフィールド君。」

「お初にお目にかかります。」

ナギ・スプリングフィールドが長子。  
ネギ・スプリングフィールドです。

今後共よしなをお願いいたします。」

固い挨拶でナメられないようにする。

学園長と高畑は少しフリーズ。

見た目十歳位のガキが、こんな挨拶なんか普通しねえよな。

「どうか致しましたか？」

話が始まらないので解凍する。

「い、いや、何とも古風な挨拶をするのう？」

やっと動き出した学園長。

どうやら立ち上げたばかりで調子が出ないらしい。

「いえ、これから修行先での監督官に礼を尽くすのは道理かと。」

「ま、まあ。間違っでは無いの……。」

学園長は本当に十歳か？   とこっちを見てくる。

「さて、今回この麻帆良学園に教師として赴任することになりました。  
た。

何卒ご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。」  
頭を下げる。

「うむ、三学期の間じゃがよろしく頼むぞ。」  
慣れたのか流した学園長。

「それでは早速ですが私の職務は何ですか？」  
知っているけど一応聞く。

「うむ、ネギ君には女子中等部二年A組の担任と英語教師をやって  
貰いたいのじゃ。」

「……………」

沈黙が流れる。

「む？   どうした？」

学園長が不思議に聞いてくる。

この野郎！ 何が、どうした？ だ。

「いえ、先程有り得ない言葉を耳にしまして。」

「何をじゃ？」

「はい、英語教師については妥当ですが、担任とは有り得ないので無いですか？

一応日本の教育法を調べましたところ、教員実習生は副担任までで、担任が指導官になるのでは？」

常識を当てる。

「うむ、本来はそうなのじゃが、今回は修行ということなので特例的に担任を任せることになった。

なめに、指導官にはこの高畑君を付けるから心配無用じゃ。」

「そうですか……。それではご指導よろしくお願いします。高畑先生。」

「うん、よろしくね。ネギ先生。」

いけしゃあしゃあと言いやがって。

役立たずの癖に。

「それでは2年A組の出席簿を貰えますか？ 高畑先生。

生徒の名前を覚えていたので。」

「うん、分かったよ。少し待ってて。」

高畑は出席簿を取りに行った。

「さて、次の確認ですが。

赴任してからの私の住居はどちらですか？」

今のうちに変更しとかないと。

「うむ、ネギ君には生徒の部屋に入って貰いたいのじゃが。」

「……………」

また沈黙が支配する。

「あの、生徒って女子生徒ですか？」



「うむ、ワシの孫と預かっている子なのじゃが。」  
やっぱりか。

「いえ、いくら何でもそれは無いでしょう？  
生徒とは言え女性と同室なんてやってはいけないことですよ？」  
顔をひくつかせ、あくまで一般論を言う。

「フーム、実はそこ以外に空いている部屋が無いのじゃ。独身者用の寮は一杯じゃし、教師の寮も定員じゃ。」

「なら私は自分で住居を用意します。」

幸いにもアパートを借りる位のお金は持っていますから麻帆良学園の近くのアパートを借りて生活します。」

既に借りて住んでいる。マンションだが。

「いや、それでは緊急時に学園に駆けつけられないのではないのかの？」

何とか引き止めようとする学園長。

「たかだか1ヶ月の実習で緊急事態は起こらないでしょう？  
それに、寮が一杯ならこれしかありません。これは譲れない一線です。」

というか、まだ修行の身である私を緊急時に動員する事自体、あり得ないかと」

毅然とした態度で言い放つ。

学園長もこれ以上は無理かと理解したのか仕方なく引き下がった。

「さて、次は給料です。」

いかほどの給料条件になっていますか？」

給料なんかいらんが一応決めとく。

「うむ、給料なんじゃが。」

ワシが預かっておいて、必要になったら支給するという形はどうじやろう？」

この解答には啞然とする。

「つまり私はお金が必要になったらその都度、学園長にお伺いを立てなくてはならないと？」

「うむ、ネギ君はまだ九歳じゃからお金はあまり持たないほうが良いと思ってな。」

完全にナメてやがる。

「お言葉ですが、私は3歳から一人暮らしをしてお金の大切さはこれらの大学生よりかは身に染みて分かっているつもりですが？それに、五年間魔法世界で暮らしていたのでお金の管理は出来ます。」

給料全額支給を要求する。

「う、うーむ……」

学園長は黙るしかない。

「しかし、魔法世界の生活じゃからこっちの世界ではまだ不慣れじやろ？」

まだ諦めないのか食い下がる。

「私はこの世界においても一年間一人暮らしをしているので金銭感覚は麻痺していません。」

俺も食い下がる。

「……………」

にらみ合いが続きついには

「……………分かった。給料は全額支給する。」  
学園長が折れた。

「ありがとうございます。」

一応頭を下げとく。

「それと、私の仕事の範囲についてですが。」

「範囲？…じゃと？」

「はい、私は教師としてこの学園に赴任します。  
ですから教師以外の職務はしません。」

「教師以外…とは？」

学園長が探るような目つきをする。

「はい、失礼ながらこの日本の魔法関係の勢力を調べましたところ、この関東魔法協会と関西呪術協会は冷戦状態にあるとか。

そして、関西呪術協会がこの麻帆良学園に度々攻めて来るらしいですが、私は基本的に不干渉とさせて貰いたいのです。」

「ほう、何故じゃ？」

表情は優しげだが目が一ミリも笑ってない。

「私の名前のせいです。」

知っての通り、私の父はナギ・スプリングフィールドです。

その息子が関東魔法協会についたと知られれば勢力図に変化が出てしまいます。

私はそういったことに興味が無いので不干渉とさせていただきます。

「

頭を下げながら決定のように言う。

学園長も理屈では分かるので否定は出来ない。

「分かった。組織間の争いにはネギ君は不干渉とする。」

学園長も渋々ながら納得する。

「それと、魔法使い間のトラブルにも不干渉をお願いします。」

追撃するように言い放つ。

「な、何故じゃ？」

今までの計画があるので驚いて聞く。

「私がこの学園に来たのはあくまで一般常識を学ぶためであり、魔法の修行に来た訳ではありません。

よって、魔法関係についても不干渉をお願いします。」

正論で押し通す。

「いや、しかし魔法関係までとはオーバーでは無いかの？」

流石に承伏しかねるのか食い下がる。

「いえ、こういう線引きは最初にしとかなくてはなあなあになってしまいます。」

魔法の訓練はこの修行が終わってからします。」  
あくまで引き下がらないことを突きつける。

学園長もここまで正論を言われるとごり押しは出来ないと悟り。

「では緊急事態以外では不干涉というのはどうかの？」

「もしも学園が本当に危なくなったら救援をして欲しいのじゃ。」

譲歩案を出して来た学園長。

流石に完全不干涉は無理か。

「……分かりました。本当の緊急時には駆けつけます。」

しかし、所詮は見習い魔法使いの力ですから期待はしないでくださいね？」

こちらからも折れる必要はあるか。

一旦ここで切ります。

### 13 確認

高畑がようやく出席簿を持って学園長室にやって来た。

多分タイミングを伺っていたんだろう。

しかし、そんな雰囲気は一切出さずに

「ああ、ありがとうございます。わざわざ取りに行かせてしまつて。」

笑顔で出席簿を受け取る。

「いや、僕の方こそ探すのに時間が掛かってしまつて済まなかったね。」

高畑も惚ける。

一応こういう駆け引きは出来るのか。

出席簿を開いて軽く名前を確認するように見せて、ある所で目を見開いて驚いたように見せかける。

「ッ：あ、あの。」

明らかに驚いて声も出せないように見せる。

「ん、どうかしたかの？」

分かっている癖に惚ける学園長。

「この出席番号26のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという生徒？　もしかしてあの闇の福音ですか？」

恐る恐る聞く。

「うむ、確かに彼女はあの有名な闇の福音じゃ。」

学園長はそれがどうした？　とても聞くように話す。

「いや、なんで闇の福音がここに居るんですか？　危険ですよね？」  
魔法界では当たり前のことを聞く。

学園長は昔を懐かしむように話す。

「15年前にお主の父、ナギがエヴァンジェリンをこの学園に連れて来たのじゃ。」

「父が？」

知っているが驚いとく。

後の話は原作通り。

あのクズが他の女と結婚したかったから、邪魔だったエヴァンジェリンをこの学園に縛り付けたんだろ？

同情はするけど感傷はしない。

所詮敵。

学園長の長ったらしい話が終わり、一応コメント。

「つまり父が連れて来たから安心だど？」

学園長は頷く。

「確かに闇の福音は既に賞金は取り下げられています、危険であることは変わりはありません。

それに、この学園に15年も縛り付けられているのなら、その縛り付けた息子である私に敵意を持って何ら不思議はありません。

もし、闇の福音が私を襲って来た場合はどう責任を取るおつもりですか？」

聞いても無駄だが聞いとく。

「フオ、フオ、フオ。」

心配無用じゃよ。力はほとんど封印されとるし、ここ15年間何も起こして無いのじゃから大丈夫じゃよ。」

なんの理屈にもなっていない説明ありがとう。

予想通り過ぎて欠伸がでそうだ。

「では、もしも闇の福音が襲いかかってきた場合は処分をしても構いませんね？」

抹殺許可を要求する。

「フオ！ 処分…じゃと？」

「はい、もしもの場合ですが。」

正当防衛を行使させていただきます。何か問題が？」  
にらみつける。

「いや、仮にも生徒を処分はちよつと……。」

学園長は汗をかきながら詰まる。

「では、教師は生徒に襲われても抵抗してはいけないと？」

「いや、そういう訳では……。」

学園長はどう返したら良いか迷う。

常識で考えれば抵抗位なら許すが、長い付き合いであるエヴァを殺しても良いとは言えない。

そこに学園長に救援が現れた。

「ネギ君、エヴァは大丈夫だよ。」

彼女は僕の古い友人だ。その友人の僕が保証するよ。」

高畑が今までの空気っぷりを払拭するかのように語る。

「……そこまで言うのなら仕方ないですね。彼女のことは信じてみましょう。」

しかし、もし襲いかかった来た場合はある程度は抵抗します。これで良いですか？」

譲歩案を出す。実際は何も譲歩していないが。

「うむ、ではこの話はこれで終わりじゃ。」

学園長が強制的に終わらせる。

うやむやにするつもりだろう。

まあいい、これで大義名分は得た。

「それでは長い話になってしまいました但これで失礼します。  
学園長、ありがとうございました。」

また来月にお会いしましょう。」

頭を下げて帰ろうとすると

「ネギ君、学園内を案内しなくてもいいのかい？」

高畑が引き止める。

ああ、そういえばそういう名目で来たんだった。

「ああ、そうでした。」

私としたことがすっかり忘れていました。

では高畑先生。案内をよろしくお願いします。」

忘れていたように恥ずかしそうに笑い頼む。

高畑は快諾して学園内を案内してくれた。

学園内を一周して高畑と別れ帰る。

高畑に泊まっていけば良いと誘われたが、既にホテルを取っている  
ので拒否。

ふー。

先ずは前哨戦は勝利。

本格的な戦いは来月からだ。



## 14 ストレスの始まり

とうとう来た。原作と交わる日が。  
来て欲しく無かったがな。

原作と違い、余裕を持って登校。

出迎えはいらないと言っておいたので一人で学園長室に向かう。  
余裕を持っていたが、やはりマンモス校。

始業時間まで約一時間も余裕があるのに生徒が一杯いる。  
まるでアリの群れだ。

アリにしてはカラフルな頭をしているがな。

日本なのに純粋な黒目黒髪が少ない。

ここはインターナショナルスクールかとんでもない不良校か？

などなどツツコミ所が多すぎる校内を歩いていると

「ナギさん?!」

大声で聞き覚えがある声が背後から聞こえた。

面倒だが振り返り誰か確かめる。

高畑が俺の顔を見て更に驚く。

「ネギですよ。高畑先生。」

現在、俺は二十代前半に变身しているからナギにソックリだ。

原作と違い、メガネを掛けてないから尚更似てる。

高畑はようやく気付いたのか

「ネ、ネギ君？」

未だに信じられないように聞く。

「ええ、教師になるのに元の姿ではナメられますからね。

特に、生徒がみんな年上ですから。」

正論を言ったのが効いたのか高畑も落ち着いて

「：いやあ、済まないね、ネギ君。

君の姿があんまりにもお父さんソックリで驚いてしまったよ。」  
確かに、たまに鏡を見るとあの時見たクズにソックリでヘコむ。

「それで？ どうしたんですか？

確か私は出迎えはいりませんとお伝えしたつもりでしたが？」

高畑は苦笑いをして

「いやあ、もしかしてネギ君が生徒に絡まれたりしてないかと確認に来ただけど、その心配はいらなかったようだね。」

確かに元の姿で中等部のフロアを歩いていたら確実に迷子と思われるてしまうだろう。

「ええ、そういうことも考えられたので変身して来たんです。」

高畑は感心したように

「それにしてもネギ君。随分上手い変身魔法だね。」

校内でいきなり魔法言うんじゃないよ。

周りに一般生徒が何人もいるじゃねえか。

騒ぐと余計マズいので

「修行しましたから。

後、あまりそういうことはむやみに言うことじゃないかと。特にこんな状況では。」

周りを見渡す。

高畑も気付いたらしく

「済まないね。つい注意が散漫になってしまった。」

頭下げる。

「いえ、分かっていただければ良いんです。それでは学園長室に行きましよう。」

高畑と共に学園長室に着き、中に入る。

「お久しぶりです。今日からよろしくお願いします。」  
頭を下げる。

しかし、返事が無い。

頭を上げると学園長は呆然としていた。

「あの、学園長？」

話し掛けると学園長は気が付き

「お、おお。済まないのうネギ君。

君があんまりにもナギにソックリで見間違えてしもうたわい。」

笑いながら謝る。

いい加減この展開にも飽きた。

とりあえず、何故この姿なのかを説明し終わり。

改めて修行確認をした。

そして最後に

「ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ。

ダメだったら故郷に帰らなければならん。二度とチャンスはないが  
その覚悟はあるのじゃな？」

原作と同じことを聞きやがって。

「はい、無ければ来ていません。

帰る故郷も無いですね。」

その言葉に若干学園長室の温度は下がる。

「うむ、分かった！

では早速やつてもらおうかの、指導教員のしずな先生を紹介しよう。  
しずな君。」

「はい。」

乳がやたらデカイ女が入って来た。

「あの、高畑先生が指導教員ではありませんでしたか？」  
いつの間にか高畑は消えてる。

「うむ、高畑君は急の出張が入ったの。とりあえずしずな君が代理じゃ。」デカ乳女を見ると

「よろしくね。」

ウインクして来やがった。

普通の男ならグッと来るかも知れんが俺は全く来ない。

何か原作キャラを抱きたいとは思えない。

現実味が無いからかな？

とりあえず21Aに向かう。

ちなみに住居はアパート住まいなので寮には入らないことになった。学園長が何か悔しがっていた。

来たかこのドア。

俺には地獄の門に思える。

上の辺りを見ると黒板消しが挟まっている。

その黒板消しを外し扉を開ける。

そしてトラップをかわして教卓に着く。

教室はざわめくが無視だ。

「今日からアナタ達の担任になったネギ・スプリングフィールドです。」

三学期の間だけです。がよろしくお願いします。」教室が更にざわめいて来たが無視して

「それと、あのトラップを仕掛けた者、立ちなさい。」

その言葉に一気に静まる。

十秒程待ったが誰も立たない。

「立たないのならしばらくは全員立ったまま授業を行いますけど、どうします？」

その言葉に観念したのか、少しして三人が立つ。

春日美空、鳴滝風香、史香だ。

「このクラスでは新任者を罫にかけるのが恒例になっているんですか？」

三人に聞く。

「い、いえ。」

と答えたきり黙る。

「前任者の高畑先生はどうだったか知りませんが私はこういった悪ふざけは許しません。」

最初の黒板消し位なら笑って許してあげますが、ここまで凝ったトランプは許せません。

今回は初犯なので目を瞑りますが2度目はありません。分かりましたか？」

俺の言葉に三人は「ハイ…。」と言った。

「座って良いですよ。」

「さて、いきなり説教から始まってしまいましたでしたが改めて自己紹介を、ネギ・スプリングフィールドです。」

よろしお願いします。」

頭を下げる。

その行為のせいか若干空気が戻る。

「何か質問がありますか？」

その言葉に何人かは手を上げようとしたが、まだ空気は重いので上げない。

しかし、一人だけ手を高々と上げる。

出席簿を見ながら

「はい、えーと朝倉さん。」

呼ばれた女は立ち上がり

「私は報道部なので少しインタビュー良いですか？」

「はい、答えられる質問ならば。」

そう言うところに隠していたのかマイクと腕章を取り出し。質問して来る。

原作とは違い席からは動かず立ち上がり

「じゃあ質問です！」

先ず年は？」

「22です。」

「出身は？」

「イギリスのウェールズです。」

「今どこに住んでるの？」

「学園近くのアパートに一人住まいです。」

段々馴れ馴れしくなって来やがった。

「では、最後の質問です。」

このクラスだったら誰がタイプですか？」

あれ、こんな質問原作にあったっけ？

「残念ながら生徒は対象外です。」

模範的な回答をしておく。

若干つまらなそうだが「ありがとうございました。」と席に座る。

「では、他に無いようなので授業に移ります。」

それでは皆さんの实力を知るためにテストをします。」

案の定「えー！」という声が響く。

それをスルーして配る。

「時間は10分です。では始め。」

生徒達はテストを解き始める。

内容は実力テストのようなもので難易度はバラバラ。

「止め、では後ろから前に回してください。」

答案を回収して採点を始める。

ちなみに自習を命じた。

ほとんどの生徒は小さな声で話しているが。

採点が終わり、テストを返却する。

「随分バラバラな点数ですね。」

満点だったりとんでもなく低かったり。」

ある5人を見る。自覚があるのかみんな苦笑いだ。

「その生徒達に追従するかの様に他にも何人かいますが。」

そいつらは目を会わせようとしない。

「私の授業は常にテストを繰り返します。

そして合格点に達しない者はその都度居残りになります。

サボっても迎えに行きますのであしからず。」

俺の言葉に生徒達はブーイングの嵐だ。特に5人。

「何も難しいことは言っていないません。」

その場しのぎでも合格点が取れるように頑張れば良いんです。

ちなみに今回の不合格者は十名。

その答案を修正しなさい。

他の人は助けたら連帯責任で全員居残りです。

落ちた十名も居残りが嫌なら休み時間を使ってやるのもよし。

残ってジックリやるのもよし。

教科書を見ても良いですが、その代わり合格点は九割です。

頑張ってください。」

その言葉を言い放ち教室から出て行った。

ちなみに居残りなんか面倒なんで身代わりの人形を置いとく。

ドラえもんのコピーロボみたいにソックリに化けられる。

しかも受け答えも出来るという優れもの。

総合ショッピングサイト北郷にて発売中。

本当なら居残り授業何かしたくないが期末テストがあるから仕方な

い。

面倒だがこの方法なら成績は上がりやすい。



## 14.5 エヴァの逆恨み

エヴァサイド

学園長からは事前に話を聞いていた奴の息子は驚きを一杯残していた。  
った。

先ずはその容姿。

最初に教室に入って来た時はナギがいきなり来たかと思った程だ。  
確か学園長から聞いた話では今年で九歳の筈だが？

年齢詐称葉か？

まあ使う理由も分かるが、何せ相手は全員が自分より年上の女生徒  
だからな。

ナメられないようにという配慮だろう。

そしてどうやら父親と違って息子はマトモらしいな。  
このウルサイガキ共を正論で黙らせ主導権を握った。  
教師として見るなら合格点だろう。

しかし魔法使いとして見るなら微妙だな。

纏っているシールドは見事だが奴から感じる魔力は多いとは言えな  
い。

勿論平均は越えているが、纏っているシールドに比べれば少なすぎる。  
る。

何か道具でも使っているのか？

前言撤回。

アイツやっぱり奴の息子だ。

この私を居残りに残すだと？

確かに高い点数とは言えなかったが、こんな屈辱は初めてだ。  
まあ良い、茶々丸を見せてもらえば良いのだ。

な、何！ 他人にテストの答えを教えてはいけないだと？

オマケに罰則も付いているから堂々と見れない。

それに、九割を取らないといけないから茶々丸ではダメだ。  
しかし確実な者達は決して見せてくれないだろう。

く、休み時間に頑張らねば。

ダメだった。

休み時間だけでは終わらず、結局居残りになってしまった。

オノレ！ 覚えているネギ・スプリングフィールド！

三年になった時にこの恨み、必ず晴らす。

## 15 変態との出会い

俺は現在、図書館島に来ている。

ここに来た目的はあの本物かは分からないがメルキセデクの書のコピーと、アルビレオ・イマに会いに来た。

先ずメルキセデクの書を見つけるために地下に行く。

途中、本をコピーするために触って歩いていたら矢が飛んできた。  
鏃やじりが付いた本物だ。

普通に当たったら死ぬぞコレ。

途中、訳分かんないトラップが沢山あってうざかったが、何とか乗り越えて地下11階のゴーレムがいるラスボスの手前のセーブポイントみたいな部屋にたどり着く。

もう目で見えたメルキセデクの書をコピーする。

そしてツイスターをする気は無いので次はアルビレオ・イマを呼ぶ。

「出てこいよ、アルビレオ・イマ！ 会いに来てやったぜ！」  
そう叫ぶと

「何ですか？ 騒々しい。」

本棚から突然出て来た。

お前はスキマ妖怪か！？

「お前がアルビレオ・イマか。親父の戦友だって聞いたから会いに来てやったんだよ。」

一応そういう設定にしとく。

「その傲岸不遜なところは正にナギの息子ですね。」

ため息をつきながらアルビレオはアーティファクト「イノチノシヘ

ン」をさり気なく出す。

そのアーティファクトをしっかりと見てコピーする。

そして俺の「半生の書」を作られる前にレジストする。

「バチ！」

とイノチノシヘンが燃える。

「人の心に無断で侵入するとは何様だ？」

そのアーティファクトが何かは知らんが何という無礼！ このクズめ……。」

後ろに振り返り。

「貴様、神にでもなったつもりか？」

他人の心を覗くなど誰であろうと許され無い！ 恥を知れ！」

後ろを向いたまま言い。帰った。

アルビレオ・イマは驚きと後悔が入り混じったのか眉をひそめているだけだ。

図書館島を出て、念のためマンションに帰るまで警戒を緩めない。  
そして何重にも結界や人避けの魔法を張った自分の部屋に着いた。  
ふー。

ようやく一安心だ。

これでアルビレオ・イマのアーティファクト「イノチノシヘン」を  
コピー出来た。

この能力を使えば他人の弱みや性格が簡単に把握出来る。

ある意味一番欲しかった。

なんか早く帰りたいかったからとりあえず説教かましたが、俺が言える質じゃねえよな？

…ま、良いか。

それに、二番目も手に入れた。

原作通り、階段から落ちそうになった宮崎のどこを普通に助け、神楽坂明日菜に魔法使いバレを防ぐ。

その後、宮崎を寮に送るという口実をつけて2人つきりになる。

そして歩いている途中に空間を隔離して、外部からの認識を出来なくしてからパクティオーを無理矢理やった。

宮崎はキョトンとしたまま動かなかった。

カードが出て来て成功が分かった。絵柄も同じだったので一安心。

パニックってる宮崎に「アデアット」と言わせ「いどのえにつき」を出させた。

それをコピーしたら宮崎を気絶させ、記憶を消去してパクティオーを解除。

寮に送って終わり。

心と過去が読めるアーティファクトがコピー出来た。

これで交渉事に負けることは無い。

アルビレオサイド

その青年に気付いたのは青年が図書館島の地下に侵入してきた時だった。

最初はたまに来る高等部か大学の図書館探検部の部員だろうと思った。

しかし、トラップを避ける行動など節々に、魔法を用いていることから学園外の侵入者の可能性が出て来た。

多少、警戒を強めて侵入者の顔を確認したら驚きを隠せなかった。

ナギ？　と思わず口走りそうになる程似ていた。

しかしナギにしては若干若い。

他人の空似？　とも思ったが似すぎているので却下した。

そういえばナギにはアリカ姫との間に息子がいた。そのことを思い出した。

しかし息子にしては年を取り過ぎている。年齢詐称薬か変身魔法か？とりあえず様子を見ることにした。

メルキセデクの書の間に入って来た。

書を盗む気か？

そう思っていたら突然

「出てこいよ、アルビレオ・イマ！ 会いに来てやったぜ！」大声で私を呼びつけた。

あまりの突然に驚いた私は少しの間停止してしまった。

そして、待ってくれているらしいのでリクエストに答えて登場する。

「何ですか？ 騒々しい。」と、いかにも面倒そうに本棚の間から出て来て少し驚かす。

どうやら驚いたらしく目を見開いた。

しかし、直ぐに気を取り直したのか

「お前がアルビレオ・イマか。

親父の戦友だって聞いたから会いに来てやったんだよ。」

何ともふてぶてしい態度で話しかける。

ここまでふてぶてしいとかえって清々するほどだ。

「その傲岸不遜なところは正にナギの息子ですね。」

そう言うってしまう程ナギにソックリだった。

このまま言われっぱなしも癪なので、こっそり「イノチノシヘン」を展開して人生を読み取ってやろうと思っていたら突然。

「バチ！」という音が私の「イノチノシヘン」が燃えた。

すると、先程までは機嫌が良さそうだったネギ君が突然豹変して

「人の心に侵入するとは何様だ？

そのアーティファクトが何かは知らんが何という無礼！ このクズめ…。」

ネギ君は怒り心頭に発したのか後ろに振り返り

「貴様、神にでもなったつもりか？

他人の心は無断で覗くなど誰であろうと許され無い！ 恥を知れ！」  
と後ろを向いたまま言い放ち帰って行った。

確かに私はこの「イノチノシヘン」で他人の人生を読むことに抵抗が無かった。

普通に考えれば許されざる行為だ。

他人の人生を写し取り、なおかつその人生を読んで楽しむという行為。

確かに貴様何様だ！？ と言いたくもなる。

次からはなるべく自粛しましょう。

それが当たり前なのだから。

## 16 こいつら面倒くさい

職員室で次の時間のテストを作っていると

「うわあああゝん、センサーー!!」

「ネギ先生ゝゝっ」

泣きながら入ってくる二名の生徒。

ああ、このイベントか。

直ぐに何のイベントか分かった。

「こ…校内で暴行が…」

「見てくださいこのキズ!! 助けてくださいネギ先生っ」

大した怪我でもないのにわざわざ見せつける。

お前ら運動部だろ?

いちいちそんなキズで騒ぐなよ。

面倒くさいが、一応受け持ちの生徒が怪我? をしたので現場に行く。

「それ、女子高生アタック!!」

とその年で言ってて恥ずかしく無いのか?

と思えることを叫びながらバレーのアタックをするモブ。

激しく面倒くさい。

こういうのは小学生のうちに終わらせてくれよ。

そう言いたい立場があるので一応。

「ストップ!

何をしているんですか?」

明らかにめんどくさいです。と言わんばかりの態度で止めに入る。

「ア、アナタは?」



原作と違って子供の姿じゃないから原作程学園内で有名じゃない。

「中等部二年A組担任ネギ・スプリングフィールドです。」

それではもう一度聞きます。これは何の騒ぎですか？」

相手を睨みつけながら聞く。

モブは少し怯んだが、直ぐに立て直し

「その子達が広場を独占していたので交渉していたのです。」

いけしゃあしゃあと言いやがるモブ。

「ほう、日本では交渉の際に暴力を用いるのですか？ 随分恐い国ですね？」

「こ、コレは暴力ではありません！ 愛のムチです。」

何故か自信満々に言い放つモブ。

教師にそこまで言い切るとは根性あるな。

「ほう、愛のムチですか……。」

しかし怪我をした生徒が出た……。これは傷害ですよね？」

「け、怪我って小さな切り傷位じゃありませんか?!」

「しかし、立派な怪我だ。」

これを報告すれば実行犯を最低でも停学には出来ますよ？

その他に止めなかった人達にも何らかの処罰はつく。

そうなれば内申書に確実に響きますね？」

脅すように言う。

モブ達は顔が青くなってきた。

「しかし、今回その被害者達が告訴しないと云っている。

そうですよね？」

被害者達に聞くと頷く。

「ですので今回は謝罪だけで良しとします。後輩達の懐の深さに感謝しなさい。」

モブ達は素直に謝り帰って行った。

しかし、その顔は納得していない。という顔だ。

面倒くせえな。アイツ等またやるぜ。

生徒達にお礼を言われ、職員室に帰る。

急用が入った体育教師に担当を頼まれて、展開が読めるけど屋上にダラダラ行く。

案の定、向かい合う中部部と高等部。

もう勝手に殴り合いでもやってくれ。と言いたいのを我慢して間に入る。

「はい、ストップ。今日二回目だけど何がありましたか？」

やはり原作通り、高等部が屋上を自習の名目で占拠して授業を妨害した。とのこと。

「高等部の皆さんに聞きます。

自習と授業。どっちが優先ですか？」

正論で帰ってくれと遠まわしに言う。

「しかし、私達が最初に使っていたのをその子達が勝手に入って来たんです。」

反論して来やがった。マジこいつバカ過ぎ。

「ここはどこですか？」

中部部の屋上です。中部部が授業に使うのがそんなにおかしいですか？」

最終通告を出す。

「た、確かにここは中部部ですが関係ありません！ 早いもの勝ちです！」

二度もチャンスを与えたのに全て無視された。

「そこまで言うのなら仕方ないですね。どうぞ使って良いですよ。めんどいので最終手段。というか決定事項を伝える。

言い負かしたと思っているのか高等部は「勝った！」とか喜んでい

る。逆に中部部は非難するような視線を俺に向ける。

「それでは高等部二年D組の担任、並びに学園長にあなた達が授業

妨害、及び傷害未遂を起こしたと伝えて来ますので、高等部の皆さんはお楽しみください。

中等部の皆さんは教室に戻ってください。今日の体育は自習です。」そう通告を伝え、戻ろうとすると、高等部の連中が俺を必死に止める。

「ま、待ってください!!」

今すぐ屋上を譲りますからそれだけは勘弁してください!!」

必死に頼むがそれを振りほどく。

「あなた達には既に今日一回チャンスを与え、さっきの場においても二回謝るチャンスを与えておいたのにことごとく無視しました。なのであなた達には話し合いが通じないことが分かりました。ここで許すと更につけ上がる可能性が高いので報告することに決めました。

後は担任や学園長に何とか処分を軽くしてもらおうよう頼んだほうが良いですよ?」

そう切り捨てて屋上から去る。

学園長や担任には嚴重な処分をお願いした。

今までも何回か騒ぎを起こして、怪我人も出したことや、ここで許すと更につけ上がることも伝え、他の教師達にも広めた。

流石にここまで話しが大きくなったら学園長も庇えなかった。

高等部の授業妨害を扇動した者や怪我を負わせた者などは一週間の停学になった。

これでもかなり甘くなったがな。

教室に戻ると神楽坂が「何であんなヒドいことをしたんですか?」と聞いて来たので

「あの人達は高等部の生徒です。

あなた達中等部の生徒とは責任の重さが違うのです。

もし、あなた達が逆の立場だったなら、多分嚴重注意の上、居残り罰則ぐらいで済むでしょう。

しかしあの人達は高等部。つまり高校生です。

あなた達より年上な分、個人に対しての責任が大きい。

だから結構簡単に停学や退学になる。

あなた達も、今のうちだから許されることでも高等部になったら許されないかも知れない。

高校生になったら学校は守ってください。

このことを肝に命じて、自分の取った行動には責任を取ってください。」

そう告げて今日のテストだ。

全員何一つしゃべらない。

これで俺にナメた態度は取らないだろう。

## 17 期末テスト前

原作ではあと二週間で期末テストだ。

本来、一週間前からのイベントだが、俺はその前に動く。

朝のHRにて

「二週間後に期末テストが控えています。

皆さんテスト勉強はしていますか？」

答えは分かりきっているが一応聞いとく。

ほぼ全員が目进行器。

「はい、分かりました。

つまり大多数の人がやっていないと。」

苦笑いが教室に蔓延する。

表立って笑うものがないのは俺の驕の成果だ。

「まさかとは思いますが皆さんはこの学園はエスカレーター式だから大丈夫。と思っていませんか？」

ほぼ全員。特に5人がギクツとする。

「高等部になればテストの成績によって留年があることを分かっていますか？留年って結構キツイですよ？」

自分より下の人間と授業を受けるとか」

5人の顔が引きつっている。

「それに、小、中学校の授業は全部の学年の基礎と言っても過言ではありません。

小、中で良い成績を取れば基本的に高校でも良い成績を取れます。基本的に高校の授業は中学の発展ですから、基礎さえ出来ていれば簡単に理解出来ます。」

一応本当のことを話す。

案の定、生徒達は「へー。」と感心している。

まあ、中学生ではこの情報はあんまり知らないだろう。

「ですから、中学生の時に頑張った方が後々楽なんです。

そのために今回の期末テストは頑張りましょう。

それと、調べましたがこの二年A組は万年最下位らしいですが、悔しくないんですか？

最下位ですよ？ 普通、これだけの屈辱は無いでしょう？

この結果はつまり、このクラスはロクに勉強していないバカの集まりと見られますよ？」

上位組は睨みつけてくるが大多数は下を向く。

やっぱり悔しかったのか？

「ですので、今回の期末テストは最下位脱出を目指します。

全教科の先生方に聞きましたが、皆さん英語以外の成績は芳しくな  
いらしいですね。

私の英語は伸びているのは嬉しいですが、他の教科も伸びなくては  
意味がありません。

よって、今日から居残りテスト勉強会を開催します。」

流石に居残りは嫌なのかハッキリと「はんたーい！」と言ってくる  
のが多い。

しかし

「別に最下位取っても良いなら参加しなくても良いですよ？  
その代わりに、春休みは無いと思ったほうが良いですよ？」

春休み中に補習をやると宣言したのが効いたのか反対の声は無くな  
った。

そして居残りテスト勉強会は開催された。

と言ってもやるのは英語の授業の時と同じでひたすらプリント。

本番用のテスト用紙をコピーして、文章や数を変えた位のやればテ  
ストで必ず良い点取れる方法だ。

俺のありがたい話が効いたのか全員来てくれた。  
まさかエヴァまで来るとは思わなかったが春休みは欲しいらしい。

## 18 期末テスト

期末テスト一週間前になった。  
つまり原作だ。

最も、俺は事前に動いているから問題無い。  
クラスもテスト一色で他のクラス同様、教室で勉強の真っ最中だ。  
ダラダラと教室に向けて歩いてしていると

「ネギ先生」

しずなが来た。案の定封筒を持って。

「あの……学園長がこれを貴方につて……」

「ありがとうございます。」

封筒を受け取り教室に向かう。

ある程度歩いたら周りに人がいないのを確認して封筒を開ける。

「ねぎ君へ

次の期末試験で二ーAが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。」

というふざけた内容だった。

まあ、原作通りで安心した。

もしこれで十位以内とか書いてあったらあの学園長殺していた。

とりあえず今は教室だ。

教室に入ると、全員が机に向かって勉強していた。

原作を知っている俺としては不気味な光景だ。

「それでは朝のHRを始めます。」

遂に期末テストが来週に迫りました。このまま全員一丸となって頑



張れば前回までの最下位はあり得ません。

ですからこの一週間。気を抜かず、最高の条件で迎えてください。」  
とりあえず鼓舞しとく。それと

「それから、どこから流れたか知らない噂ですが、学園長がこの万年最下位の2-Aに怒り心頭して、この期末で最下位になったら特に結果が悪かった生徒は小学校からやり直しというあり得ない噂が流れていますが、全くのガセですので信じないでください。

もしも本当に学園長がそんなことをしたら国の方針に逆らったことになりますので、必ずクビになります。ですからあり得ません。

それと、この時期になると必ずこういう噂も流れますが、図書館島の深部に読めば必ず頭が良くなるという「魔法の本」があるという噂も広がっていますが、これもガセです。

もしもこんな本が本当にあるのならこの学園の生徒達は全員頭が良いくことになります。勿論そんなことはありません。ですからガセです。

それでもあるかも知れない。と夜中に探しに行ったりしたら図書館島への不法侵入、及び規則違反で期末テストは受けさせません。

つまり、0点扱いになります。

ですから夜中に散歩こうなんて思わないでください。」

ここでハッキリとフラグをへし折る。

処分をキッチリ言っておけば前例のある俺の言うことも信じる。というより信じるしか無い。

「最も、皆さんはこの一週間。一生懸命勉強をして来ました。

それは監督してる私には良く分かります。

ですから、このまま期末までの一週間。勉強していけば必ず最下位を脱出出来ます。これは予想では無く確信です。

他のクラスに見せつけてやりましょう。

君達はもうバカでは無いということを。」

この言葉を聞き、教室のテンションは上がる。特にバカレンジャー。

ここらで士気を上げといった方がテストで良い結果が取れる。

結局、図書館島イベントは起きなかった。

「魔法の本」の噂は聞いても、必要無いのでバカレンジャー達も本気にせず、勉強を続けた。

ちなみに学園長の噂話も所詮噂、それにもう最下位は無いと確信しているので心配しない。

その結果。

2－Aのクラス成績は8位という好成绩に終わった。

この結果に学園長は悔しかった。

ちなみに裏で学園長と俺のやり合いがあった。

テスト一週間前

「学園長。」

学園長に入り封筒を見せる。

「この手紙はどういうことですか？」

確か私の修行期間は三学期までの筈。」

「いやあ、修行内容が三学期だけでは足りなくての。それで延長することにしたんじゃないよ。」

フオフオフォと笑いながら言うこの糞爺。

「何故ですか？ 最初の予定と違うのは」  
冷めた目で見える。

「後々考えたらやっぱり修行期間がひと月だけというのも短すぎると思ったのじゃ。」

全く悪びれずに茶を飲む老害。

「それでは正式な教師としての契約をお願いします。」

「それはできませんよネギ君。まだ君は試験に合格しとらんじゃから。」

「分かりました。それでは試験結果が分かった時にまた…。」

今回はただ理由を聞きたかったただけだ。

それに、結果は分かっている。

### 試験結果発表後

「学園長、お約束通り正式な教師としての契約を結びに来ました。」  
イスに座り長期戦の構えを見せる。

「うむ、先ずは試験合格おめでとう。」

あのクラスをマトモな方法で最下位脱出をさせたとは凄いのう？

それと契約とは何じゃ？

既に教師の契約なら済ませているじゃろ？」

この爺、教生時代の給料で暮らせる気か？

「ありがとうございます。」

それで、契約の話ですが、前に交わした契約は教育実習生としての契約です。

今回は教師としての契約です。」

一切笑わず本気を見せる。

「フーム、教師としての契約のう？　して、内容は？」

爺も睨みつけるように威嚇して来る。

「はい、先ずは給与の問題です。」

前回までは教育実習生でしたからあまり給料は要求しませんでしたが、正式な教師になるのですからそれなりの給料をお願いします。」  
予想通りだったのか安心したように

「うむ、それは既にこちらも考えていた。勿論、教師として相場の給料を支払う。」

「ありがとうございます。それについてはその条件でお願いします。それともう一つ。」

私の立場の条件です。」

こっちが本題なので力を入れる。

「立場……とな？」

爺も警戒する。

「はい、私は普段は一般教師としての仕事以外はしない。

しかし、緊急時においては学園に救援に行く。というのが契約でしたが、今回正式な教員になる、ということでしたら私は今後一切、何があろうとも魔法関係には関わりません。」

そう告げると学園長は

「フオッ！ 一切関わらないじゃと？」

慌てて聞く。

「はい、ひと月単位の契約でしたら大した問題も起きないと思い契約しましたが、今度からは一年単位ですから何かしら問題が発生するでしょう。」

ですから私は今後一切関わりません。」

「しかし、一切とは困るのう？」

前のように緊急時だけとはいかんか？」

「いいえ、そうはいきません。」

大体そちらがいきなり修行の延長を申し出るからこうなったのです。初めにちゃんとした期間を伝えてくださればこんな交渉はせずに済みましたのに。」

あくまで学園側の責任を追求する。

「それについては申し訳ないと思っている。

しかし、常識的に考えれば分かることじゃ。『立派な魔法使い』の修行がひと月はあり得ないじゃろ？」

あくまで無罪を主張する学園長。

その後、不毛な交渉が10分程続き

「分かりました。」

前回同様、緊急時には救援に行きます。

しかし、その代わり条件があります。」

譲歩したように見せかけ、本当の目的を言う。

「もし、闇の福音が私を襲って来たら全ての処置を私が決めます。

そして私の処置について一切、口出ししないでいただきたい。」

エヴァの抹殺許可を貰う。

「処置……じゃと？」

学園長は探るように俺を見る。

「はい、前回まではエヴァンジェリンを信用して、例え襲われても学園長の指示を請う。という契約でしたが、その指揮権を私に全て任せていただきたいのです。

そうでなければ私は今回の修行期間のいきなりの延長を評議会に報告します。」

最強のカードを切る。

一般的には評議会に介入できる力を持つ北郷商社と仲が良いと思われる俺が、評議会に訴えるということは学園長に初めから勝ち目が薄い。

この言葉に学園長も拒否は出来ない。

結局、エヴァについては俺に全権を委譲する代わりに、緊急時には学園の味方をするという契約になった。

これでエヴァを殺しても文句は言わせない。

## 19 束の間の休憩

終業式で正教員に決まったことを生徒達の前で発表された。

原作と違って別に生徒達から歓声も無い。

ちよっとイケメンの、よく知らない男性の正教員就任の報告に別に感嘆も無い。

ただの社交辞令として拍手するだけ。

現実はこのなもんだ。

原作では長谷川千雨がネギの正教員就任に疑問を感じる回だが、俺に対しては何も不思議は無い。

原作と違い、図書館島に行って無いので普通に授業をしてたし、テスト対策に力を入れていたのでその功績で正教員になれたんだろ？

位にしか考えてないだろう。

この世界でも学園のファンタジーさと自分の価値観とのギャップからネットに逃げているだろうが、そんなの俺の知ったこっちゃねえ。大体アイツ自体も充分異常だぜ？

何だかんだ言ってもアイツも魔法世界に行ったし、普通こんな異常な奴らが周りにいると分かれば、俺だったら恐くてとても一緒にいられない。

引きこもるか転校する。

親の前でリストカットでもすれば何とかなるだろうに。

だというのにアイツは受け入れ、そして一緒に戦う。

命の危険を感じたら普通逃げないか？

オマケに、魔法世界編からあんま原作見てなかったけどアイツ甘いし。

命の危機が迫ったら他人犠牲にするなり相手を殺すなりするだろう？  
意味分かんない。

まあ、あの作品設定では無理か？

とりあえず長谷川は無視して今後を考えなくては。

吸血鬼騒ぎは既に起きていたから学園長に申し立てたが「それはデマじゃ」の一点張りだ。

まあ、俺が来てから犯行に及んで無いし確証も無いから今回は引き下がる。

ていうか噂になる時点であの吸血鬼の力量のたかが知れる。

それとも布石か？

じゃなきゃ封印と平和な時間でそこまで力と頭が衰えたか？

まあ、良いか、とりあえず学園長に進言したことになるから大義名分が出来た。

闇の福音がまた吸血行為を始めたかも知れない。と伝えたにも関わらず、学園長はそれを無視した。

これで言い分は出来た。

関西呪術協会のあの長がいかにも無能か分かった。

あの野郎、俺の忠告をただの子供の話程度しか聞かず、何もしてねえ。

何かムカついたから木乃香殺そうかなー。

アイツが死ねば全てが丸く収まるんだよなあ。

## 20 吸血鬼？

新学期になってしまった。  
とうとう休みも終わりか。

この感覚は小学校の頃から変わらねえな。

「3年！ A組！ ネギ先生ー！！」

というのは無く。全員静かだ。

ていうかそういう風に騒げたからな。

「改めまして、3年A組担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。」

一年間よろしくお願いします。」

パチパチパチパチ。

と拍手が帰って来る。

ん？

鋭い視線の先にはエヴァ。

何か原作と違って殺気がこもっているような。

もしかして居残りの常連だったから俺に逆恨み？

嫌だねえ、無駄にプライド高い奴は。

エヴァからの視線を受け流し。

「今日は身体測定です。準備をして待っていてください。」

HRを終え教室を出る。

職員室でくつろいでいると

「先生ーっ大変やーっ

まき絵が…まき絵がー」



というわざわざ叫びながら入って来やがった。

普通に入ってこいよ。

保健室でスースー寝ている佐々木を取り囲む3年A組。

「どうしたんですか？」

「なにか桜通りで寝ているところを見つかったらしいのよ……」  
という原作通りの会話をしとく。

周りでは「大したことないじゃん」とか「甘酒飲んで寝てたんじゃないかなー？」といった呑気なことを喋る。

「はいはい、みんなは身体測定の続きをして来てください。」  
とりあえずウザいので教室に帰す。

残ったのは俺としずな。

ここで常識を尋ねる。

「しずな先生。佐々木は桜通りで寝ていたんですよね？」

確認として聞く。

「ええ、そうだけど？」

しずなは何故そんなことを聞く？ という風だ。

「もしかしてレイプされたのではありませんよね？」

俺の言葉にまさか！ としずなは佐々木をよく見る。

「着衣はしっかりとしているので可能性は低いと思いますが、もしかして膣内にレイプ痕が残っているかも知れません。

確認をお願い出来ますか。」

しずなにレイプチェックを依頼する。

「ええ！ 私がですか？」

で、でもそういうのは医者が見ないと分からないんじゃない？」

「ええ、確かに医者に見てもらった方が確実ですが、佐々木のことを考えると寝ている今確認した方が良いかと。」

しずなにレイプチェックを頼み保健室を出る。

しばらくしてしずなが出て来た。

「私が見る限り、痕はありませんでした。」  
と言われたので

「ありがとうございます。とりあえずは警察沙汰では無いようですね。」

安心したように笑顔で答え、学園長室に向かう。

「学園長、既にご存知かと思いますが、うちのクラスの佐々木まき絵が恐らく吸血鬼に襲われました。」

一応報告。

「ふむ、桜通りで寝ていたことは分かるが、吸血鬼に襲われたとは限らんじゃろ？」

あくまでとぼける爺。

「魔力の痕跡が残っていました。例え吸血鬼では無かったとしても魔法関係者が関与したことは明白です。」

それに、佐々木に残った魔法の感覚は闇の福音に非常に似ていました。」

「エヴァが襲ったという確証が無いのう。」

証拠はあんのか？ と見ってくる。

「確かに闇の福音がやったという確証はありません。」

しかし、現時点で状況証拠から最も怪しいです。

しかし、現状では犯人とは言い切れないため捕縛も出来ません。

ですから、学園長には闇の福音を監視して貰いたいです。それが出来ないなら直々に注意をしていただきたい。」

「注意？」

学園長がこちらを見てくる。

「はい、もし闇の福音では無かったとしても牽制位にはなりますし、もし犯人だったのなら多少でもプレッシャーを掛けられます。」

現状ではこれが精一杯か？

「ふむ、しかし確証も無いのに疑う訳にはいかんじゃろ？」

あくまでエヴァは無罪を主張するか

「ではどうなさると？ 誰か死人が出ない限り動かないと？」

「そうも言っておらん。」

エヴァだと言う確証が見つかったら流石にワシも動く。」

この位が潮時かな？

別に本当に注意してもらいたい訳じゃ無いし。

ただ、警告した。という事実が欲しかった。

「それでは分かりました。現状は動かない。ということで良いですね？」

確認すると

「君は動かんのか？」

案の定聞いてきた。

「ええ、契約通り私は魔法関係には不干渉を貫きます。

今回の報告もクラスの生徒が襲われたから報告したままで、私に直接被害が無い限り動きません。」

改めて契約内容を言い渡す。

「ちょっとは動いてくれんかのう？ 生徒が何ならかの事件に巻き込まれたんじゃないから。」

「緊急時には動くと言いましたがこれが緊急時なのですか？  
でしたら大抵のことは緊急時ですね？」

バカにしたように笑い学園長室を出る。

翌日、宮崎のどかが保健室に運ばれた。

## 21 吸血鬼？

宮崎のどかが襲われたのでまたまた学園長室へ

「学園長。昨日お願いしておいた闇の福音への注意勧告はちゃんとしてくださいましたか？」

無能め、という感じに見る。

「勿論、ちゃんとしとおいたぞ？」

あくまで無関係を貫くらしい。

てめえはエヴァの弁護士か？

「それではその注意勧告は無意味に終わったらしいですね。」  
ゴミを見る目で伝える。

「ふむ、しかし、エヴァがやったと言う確証はまだ無いのう。」  
てめえが証拠隠滅を手伝ってるんだろ？ このまさしく老害め。

「では警察に通報しないのは何故ですか？ 2日連続で女生徒が襲われたのですよ？」

もし本当に闇の福音に関係無いのなら警察位呼ぶでしょう？」

「うむ：確かにもう警察を呼んだ方が良いかも知れんが、出来るなら此方で解決したい。」

なにこの防衛関係者みたいな言い方。

たかが変態の通報だぞ。

「しかし此方では未だに後手に周り、犯人に嘲笑われています。  
オマケに襲われた生徒は2日連続で私の受け持ち。何か悪意を感じますねえ？」

学園長の目を覗き込む。

「さあてな？」

少しもブレねえ。無駄に長生きしてねえか。

「とにかく、今回は私から闇の福音に警告しておきます。」

その時の態度で方針を決めます。」  
そう言って学園長室を出て行く。  
学園長が何か言っているが無視。

HRが終わり、エヴァを呼び出す。  
名目は昨日のテストについて。

職員室で結界を張り周りに会話が聞こえないようにしてから

「最近の吸血鬼騒ぎはアナタが犯人ですか？」

流石に単刀直入過ぎたか？

と思ったら

「そうだ。」

.....。

即答？！

まさかの即答。ちょっとは駆け引き位あるかと構えてた俺がバカみたい。

「どうした？そんなに驚いた顔をして？」

バカにするように笑うエヴァ。

ちよっとムカついた。

「いえ、あんまりにも簡単に自白してくれたので思わず呆気に取りましたよ。」

こちらも笑い返す。

「それで？ 何故こんなことを？」

何をかは言わないが、俺の質問にエヴァは

「なに、あのナギ・スプリングフィールドの息子であるお前にちよつとした挑発だ。」

と軽く答える。

「それって親父がアナタに何かしたんですか？」

俺の質問にエヴァの顔が怒りに染まり

「貴様の父親のおかげで私はこの学園に15年も縛り付けられている！」

父親が死んだんなら息子であるお前に責任を取ってもらう。」

まあ、当たり前か。

普通そう考えるだろうな。

「ほう、責任とは？」

「貴様の血を死ぬまで吸えばこの呪いが解ける可能性がある。

後は分かるだろう？」

そう言いエヴァは出て行った。

その言葉、宣戦布告と受け取った。

例えお前は違うと言っても俺はそう受け取った。

俺はエヴァの宣戦布告を受け取り、直ぐ社会戦を仕掛ける。

北郷ネットに「修行先に闇の福音がいた。

そしてまた人間を襲っている。」と書き込んだ。

さらに証拠として襲われた女生徒の資料や襲われた状況、さつき録音した宣戦布告を俺の声は変えてネットに流す。

そして代理人を通じてメガロメセンブリアに働きかけ、闇の福音の賞金の復活と更に700万ドルに賞金を引き上げさせた。

引き上げ理由としては、今まで潜伏して死亡したかのように見せかけ、安心させた所でまた人間を襲う卑劣さ、など適当にでっち上げさせた。

まあ、実際はただ脅しただけだ。

人間生きてりや秘密位ある。長生きすればするほど増える。

俺の書き込みは瞬く間に広がり、混乱が起きた。

評議会に働きかけた甲斐あって、宗教省が直ぐに闇の福音の復活を正式に発表した。

賞金は100万ドル上乗せされたことが更にウワサを広ませた。

そのせいで学園に侵入して来る侵入者が激増した。

この事実を知った学園側は対応にてんやわんやだ。

中にはこの機会に闇の福音を討とうと血気盛んするものも出る始末。

俺はひたすら傍観して我関せずを貫いた。

## 22 吸血鬼？

翌日、早朝から学園長から呼び出しをくらった。

「何ですか？　こんな朝早く。」

現在午前6時。

マジ眠い。工作に時間を取られたせいで寝不足だ。

「眠そうじゃのう？　ワシも眠いんじゃよ…。」

一睡もしておらんからのう。」

爺が恨めしそうに此方を見る。

「そうですか大変ですね。そのお年で徹夜は応えるでしょう？

いけませんよ？　徹夜は。」

完全スルーして答える。

「誰のせいじゃと思っとる。」

昨日の夜に闇の福音が復活したというウワサが広まり、本国さえそのウワサを信じ、賞金を復活させるだけでは飽きたらず大幅アップさえして来た。

そんなことが出来る人間は限られとる。」

じっと見て来て

「君じゃろ？」

再確認するかのように言って来る。

「はい、私が広めました。」

それがどうした？　とでも言わんばかりの態度で言う。

「何故こんなことをしたんじゃ？　おかげでこっちは朝から侵入者の対応に大忙しじゃよ。」

「それは私のせいではありません。

闇の福音から私に向かって宣戦布告をして来たので、私はその対応をしたまです。」



堂々と自分に非が無いように言う。

「宣戦布告？」

眉をしかめ、始めて聞くことに多少驚く。

「はい、昨日闇の福音に直接、最近起きている吸血鬼騒動はアナタか？ と訪ねたところ本人が「そうだ」と返し、私に対して明確な敵意を見せましたのでその報復として通報しました。」

俺の言葉に学園長は頭を抱える。

予想出来たことに自分の対応が遅れたことを知ったのだ。

「それで、次はどうするのじゃ？」

その言葉に俺は

「お答え出来ません。」

突き放す。

「何故じゃ？」

「学園長の闇の福音に対する行動を見るに、学園長は闇の福音容認派と考えられるので、お答え出来ません。」

事実を伝える。

「ほう？ ワシが君よりエヴァを取ると言いたいのかの？」

学園長は睨みつけるように俺を見る。

「はい、僅か一年にも満たない私より、十五年以上の付き合いの闇の福音を味方するのは決して可笑しいことはありません。」

ですから、学園長には私の次の行動はお話出来ません。」

冷静に看破する。

まあ、普通大した付き合いの無いガキより長い付き合いの友人を氣遣うのは当たり前か。

「あえて訪ねますが、何故そこまで闇の福音を信用出来るのですか？」

理由は何となく想像出来るが聞いとく。

学園長は目を細め昔を思い出しているのか

「あれは十五年前のことじゃった……。」

めんどいのでカット。

つまりあのクズが、呪いを掛けてここに縛り付けたから大丈夫。とか言う頭が可笑しいんじゃないか？ という内容だった。

「つまり父がわざわざ連れて来たから大丈夫と？」

学園長が頷いて答える。

「私はそうは思いません。」

もしも私がこの学園に十五年も中学生をさせられ続けたら頭がおかしくなります。

多分、絶望から自殺するでしょう。

それに、父が「光に生きて見ろ」なんて約束をしたというのに、約束の三年が経っても迎えに来ないんじゃないじゃ普通は闇に染まります。

むしろ今回の闇の福音の行動は当然の結果です。」

俺の正論に返せないのか学園長は無言だ。

「では、そこまで闇の福音を信じるのならチャンス差し上げます。もう一度、闇の福音と話をして私に対する攻撃を止めさせてください。」

しかし、今回は注意ではなく警告をしてください。

もしその警告を無視するなら闇の福音を害獣としてそれ相応の処分を決定します。」

そう言い放ち学園長室を出る。

今日は朝からエヴァは休みだ。

学園長が説得&説教をしてるんだろう。

エヴァにしてみればたまったもんじゃ無いだろう。

何せもう4時間目に突入している。  
地獄だな……。

4時間目が終わり、昼休みになった。

俺は飯を食うため、職員室を出ようかと思っていたらエヴァが来た。  
余程疲れたんだろう。

ふらふらしながら俺の所に来た。

気を利かして結界を張り、外部と遮断する。

その瞬間、下げていた顔を上げて憎しみの視線を向ける。

「よくもやってくれたなあ？」

怒りのせいなのか、疲れのせいか顔が引きつってる。

「何がですか？」

涼しい顔で聞いたのがムカついたのか

「何がですかと……!!？」 貴様が余計なことをしてくれたおかげで  
こっちは大迷惑だ……!!

何が悲しくて爺の朝から五時間の説教を受けなくてはならない……!!」  
五時間だったのか……。

それについては同情するよ。

「それはアナタが私に宣戦布告するからです。

だから私は先制攻撃として社会戦を仕掛けたまです。

それに、生徒達に襲いかかったのは事実ですし。それで済んだことに感謝して欲しい位ですよ。」

俺の偉そうな態度にブチ切れたのか、顔を真っ赤にして

「このガキやあ調子に乗りおって……!!

覚えてろ……!! 爺が何か言っていたがそんなことは知ったことか……!!  
必ず貴様の血を吸い尽くしてくれる……!!」

そう宣言して出てった。

アイツマジ単純。

たかだかこの程度の挑発にここまで乗るとは……。

長生きしてんならこの程度で切れんなよ。

さて、明らかな警告無視だ。

此方も準備せねば。

本来なら今すぐ殺しに行けば簡単だが、まだ殺さない。

一応利用価値はあるからな。

とりあえず今は飯だ。今日はゲンを担ぐためにカツ丼にしよう。

## 23 吸血鬼(終)

再度の宣戦布告を受けた俺はとりあえず彼方から攻めて来る大停電を待つ。

ただ殺すだけならアイツが風邪引いている時に家ごと消滅させれば良いが、それでは意味が無い。

それに、先制攻撃を仕掛けたら学園長からの介入がウザったい。あくまで攻められたから殺した。という大義名分が必要なのだ。それに、その事実が後々役に立つ。

大停電の日、夜8時。

『こちらは放送部です：これより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてくださいさ：』

アナウンスが終わり、一気に暗くなる。

一応、原作通り懐中電灯片手に見回る。

あ、そうそう。言うの忘れていたけどカモは殺した。

罠に引っかかっている所をトドメを刺した。アイツがいると面倒くさいので。

と、昔を思い出していると佐々木まき絵が全裸で登場。

しかし何故全裸？。

アイツの趣味か？

「ネギ・スプリングフィールド：エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさまがきさまにたたかいをもうしこむ…。

10分ごまでにだいよくじょうまでこい」

何故か漢字変換をしない。

もしかして咬まれるとバカになるのか？

主人があんまり頭良く無いからなあ。

と無視していたら、佐々木はリボンを使い、とんでもないアクロバティックに去っていく。

俺はそれをただ見ているだけ。とりあえずアイツの誘いを受ける必要無いのでどこかをフラフラ歩いて時間を潰す。

30分後。

「ええい、奴は何時来る!？」

エヴァンジェリンはイライラしていた。

四時間以内に勝負を決めないといけないのに、30分も無駄にしたのがイライラの原因だ。

「もしかしてこのまま時間切れまで逃げる気か？」

エヴァンジェリンは焦る。

あっちには時間制限は無いが、こちらは明確な制限がある。

逃げ回られたらこちらが不利になるばかりだ。

「宮崎のどか、綾瀬ゆえ、早乙女ハルナ! あのカギを連れてこい!」

吸血した下僕に命令する。

しばらくフラフラしていると、今度はメイド服を来た図書館組が来た。

原作とは違うが、どうやら宮崎のどかが相部屋の二人を咬み、エヴァンジェリンの下僕になったらしい。

「エヴァンジェリンさまはひどくおいかりです…ですからむりやりつれていきます。」

宮崎が普段の人見知りなどどこ吹く風かと言わんばかりに宣言して

くる。

本当なら殺しておきたいが、後々面倒なので眠りの霧を食らわせ、全員寝かせた後に寮に送った。

更に30分後

「ええい！ あの三人は失敗したかつ。」

エヴァンジェリンは先程よりもイライラしていた。

それもそうだろう。ただでさえ少ない時間が無駄に過ぎていく。

残り時間は約三時間。

このままではジリ貧になってしまう。

仕方ない自分で行くか。

「茶々丸、下僕共、こちらから向かうぞ！」

立ち上がり指示する。

「了解しまし：高エネルギー反応多数！ 全方位：」

いきなり大浴場の窓や壁から魔法の矢が飛び出して来た。

成功したか…？

ずっと外からイドノ絵日記で心を読んでいたら、どうやら自分から攻めに行くらしいので先手必勝で魔法の矢を全方位から放った。

一応、中に残っているエヴァの下僕達が死なないように捕縛型だ。

瓦礫と化した大浴場の中からガキとロボットが出て来た。

どうやら下僕はやっただしが、本体は多少ダメージが残った程度か…。

「やあ、闇の福音。せっかくのお誘いだから趣向を凝らしてみたが、如何だったかな？」

お楽しみいただけたかな？」嘲るように笑い、話し掛ける。

「貴様のくだらん趣向とやらのせいで時間は無駄にし、せっかく用

意した下僕共は使えなくなった。

貴様どうしてくれる？」

親の仇を見るように見てくるエヴァ。

「さあ？ そっちがホストなんだからそっちで何とかしてよ。」

どうでも良さそうに言い放つ。

エヴァはますます憎々し気に睨みつける。

「それが貴様の本性か……。そっちの方が似合っているぞ？」

エヴァのからかいを無視して、いきなり逃げる。

いきなりの逃走に驚くエヴァ。

しかし直ぐに気を取り直り。

「ちっ、追うぞ茶々丸。」

従者と一緒に追う。

よし、ちゃんとして来ているな。

原作ではネギは罠まで誘導するように逃げた。

ちなみに俺もそうしている。原作で通用したんだからこっちでも通用するだろう。

「食らえ、魔法の射手、連弾・氷の17矢！！」

「魔法の射手、連弾・雷の17矢。」

時々撃ってくる魔法の矢に反撃して逃げ続ける。

エヴァはただ時間稼ぎか、学園外に出る気だろうと思った。

学園都市の端である橋に向かっていているからだ。

最初に随分挑発した割にやることは以外にセコいな。とネギを侮る。

「リク・ラクラ・ラック・ライラック。来たれ氷精大気に満ちよ、

白夜の国の凍土で氷河を、こおる大地！！」

その魔法でネギを落とす。

橋に降り立ち勝利を確信する。



「：意外にセコい作戦じゃないか、え？ 先生。」  
ネギを見下し

「これで決着だ。」

倒れているネギに近づくと突然。

魔法陣が展開してエヴァと茶々丸を縛る。

「なっ：！！ こ、これは：捕縛結界！？」

ネギを見てみると「引かなかった」とでも言わんばかりに笑っている。

しかし、自身は焦らない。

何故なら既に対策は取れている。

「やるなあ、ぼうや。関心したよ…。

しかし勝つのは私だ。茶々ま…」

その言葉を言い終わる前にいきなり衝撃が来た。

ようやくこの罠まで誘導出来た。

エライ面倒だったが、とりあえずは色々見れたから良しとしよう。

こおる大地もコピー出来たし。

何かエヴァが勝ち誇ったように叫ぶから、とりあえず終盤に向かうか。

サウザントマスターの雷の斧を叩きつけた。

結界諸とも橋が崩れ落ちて行く。

やっぱり威力だけはスゲーな。あんまり使い勝手無いけど。

橋は粉々になったが、エヴァだけが浮いている。

当初の目的通り、あのロボットは破壊出来た。アイツ結構邪魔だったんだよなあ。

エヴァは雷の斧に耐えきったらしいが、茶々丸は耐え切れ無かったらしく、粉々に砕け、川に落ちていった。

「貴様ーっ！！　よくも、よくも茶々丸をつ！！」

どうやらエヴァはエライショックだったのか、怒り心頭している。まあ、狙い通りだが。

「たかだかロボットが壊れた位でガタガタ騒ぐな。また作れば良いだろ？」

その言葉にエヴァンジェリンはブチ切れた。

確かに茶々丸はロボットだからまた作れば出来るが、もう以前の茶々丸には戻らない。

経験からある程度の感情を持ち始めていた茶々丸を、また同じように作っても全く同じ茶々丸は戻らない。

それに、既に茶々丸はエヴァンジェリンの家族だったのだから。家族を殺され、エヴァンジェリンは間違いなくブチ切れていた。

「貴様っ！！　もう許さん！！」

爺の約束などもう知るかつ！！　殺してやる！！」

エヴァンジェリンはありったけの魔力を込め。

「リク・ラク・ラク・ライラク、契約に従い我に従え氷の女王、来たれとこしえのやみ！　えいえんのひょうが！！」

凄まじい氷河が現れ、ネギが一瞬で凍りついた。

「全ての命ある者に等しき死を、我は安らぎ也、おわるせかい！！」  
その言葉と同時にネギが砕け散った。

終わった。

そう思っていたら、突然上空に閃光が走る。

何だ？　と上を覗いたらまた突然。

「魔法の射手11矢！！」

という呪文が聞こえ、様々な属性の魔法の矢が全方位から飛んで来た。

フーツ、上手く行った。

アイツが雷の斧食らって上がって来る前に、式神と位置交換しといったおかげでバレずに安全な位置に逃げれた。

更に、その式神に最大威力のおわるせかいを見れたから予定通りに上手く行った。

後は助っ人に任せよう。

この日のために闇の福音の共同討伐に募集したんだから。

やっぱり懸賞金を上げたおかげでいっぱい集まった。

全部で二百人以上だ。

その人数で一人が魔法の矢を11本撃てば単純計算で二千本以上。

流石に闇の福音も効いただろう。

しかし、耐えきったらしい。

流石に死んではくれないか。まあ、予想通りだ。

後はアイツ等に任せて高みの見物としよう。

いくら闇の福音が強くてもそれなりに腕に自身がある奴らが二百人以上いるんだ。なかなか決着はつかんだろう。

しかし、その内時間切れになって自然に決着がつく。

にしてもスゲエなあ。

あの人数にも遅れを取らず何人も殺してる。

しかし奴らもただじゃやられない。

何人かは魔法ではなく狙撃銃や地对空ミサイルで狙って隙を伺う。

他の奴らは普通に魔法を使って戦っている。

そんな戦闘が長く続き、討伐隊の奴らもかなり減って現在五十人未満。

エヴァもかなりダメージを負って一進一退だ。

そんな状況に突然終止符を打つ。

学園に明かりが戻ったのだ。原作通り予定より早く終わりこれで終わった。

エヴァは力尽き落下していく。

落ちていくエヴァに弾幕が集中して体はズタボロだ。

念のため、俺の魔法の矢で顔や心臓など重要器官を完全に破壊した。その結果、そのまま川に落ちて二度と浮かんでこなかった。

やれやれ、ようやく終わったか。

さてと、後は後始末だ。

この後もちろんと考えてある。後は楽勝だ。

## 24 策略

エヴァが死んで直ぐに「闇の福音死亡!!」の知らせを走らす。そしてその討伐をしたのが麻帆良学園、学園長の近衛近右衛門だと報じる。

名目は、闇の福音が修行中であるネギ・スプリングフィールドに度々挑発をして命の危険性があったため、討伐隊を雇い、遂に直接的に襲って来た闇の福音を討伐した。というものだった。

ちなみに討伐隊の奴らとは直接の面通しはしていないし、依頼する時は爺の名前で依頼した。

だから討伐隊の面々は当然「近衛近右衛門が依頼して来た。」と答える。

これで更に信憑性が高まる。

学園長は否定し、ネギ・スプリングフィールドが討伐したんだ。と答えるが、英雄の息子と言えど僅か9歳の子供が闇の福音に勝てる訳無いので、誰もが学園長のジョークと受け取って本気にしなかった。

トントン拍子に話は進み、遂にはメガロメセンブリアの評議会から、「近衛近右衛門が闇の福音を討伐した。」と正式に発表したことで終わりを迎えた。

近衛近右衛門には賞金として700万ドルが支払われ、残った討伐隊の面々からの支払い要求を無視することも最早出来ないので、山

分けしてこの話は終了した。

よし、やっと終わった。

既に仕込んでた議員達を動かし、老人達に正式発表をさせてあの爺に否定出来なくさせた。

俺のことは助けられた少年扱いにしたので対した噂にもならなかったから、一般人はほとんど知らない。

学園長がいくら俺がやったのだと言っても最早誰も信じない。

学園の教師達も信じておらず、誰もが学園長を称える。

しかし学園長自身は深いショックだったのか、学園長室に引きこもっている。

そのことを俺が「長年の友人であつた闇の福音を討伐したのがショックだったのだ。」と流す。

更に「それでも私のために闇の福音を討伐してください。」と学園長を絶賛したため、教師陣の学園長に対する評価はうなぎ登りだ。

翌日、クラスにはエヴァとロボは海外に転校したと伝えて誤魔化す。魔法生徒達は死んだことを知っているので目を伏せる。

知らない奴らは少し残念がるだけでそこまで気にして無い。

5分後にはほとんどの奴らは普通の雰囲気に戻り今日のテストをしていた。

転校した元クラスメイトより今日残されるのを回避したかったのだ。

## 25 学園長の苦悩

正直あの少年？　を甘く見ていた。

エヴァにネギ・スプリングフィールドを襲うようけしかけたのは完璧にワシのミスじゃ。

大方、処分だといっても精々痛めつけて本国に送還する位と侮っていた。

まさか討伐隊を雇い、完全に抹殺するとは…。

ワシも耄碌したもんじゃ。あやつの真意を読めなかったとは。

あやつは最初から殺す気だった。

だからこそ、自分からは動かず、エヴァから攻めてくるよう仕向けた。

殺しても最悪正当防衛が成立して罪には問われん。

それに、何度もワシに「危険では無いか？」と確認していたからワシも表立って批判できん。

いくら殺したことを糾弾しても「そちらに何度も助けを求めたのに対応されなかった」とでも言われればワシの発言は意味が無くなる。

多分、あの時から考えていたんじゃないかな。

2月に見学として学園に来た際、出席簿のエヴァを見た時のネギ君の目は驚愕の一色に染まった。

五年も魔法世界で暮らしていたならエヴァの顔を知っていてもおかしく無いから、ただ驚いているばかりじゃと考えてしもうた。

あの時からエヴァを殺す計画を立てていたんじゃないかな…。

準備期間にふた月あったんじゃ。

もしかして何か計画してないか警戒しておったが、まさかメガロメセンブリアの議員達を取り込んでおったとは……。

思いもせんかった。いや、少し考えれば分かったか？

今では業界最大手の北郷ネットの代表とネギ君が懇意にしているのは噂で聞いておった。

ただの噂と思い、大して調べ無かったワシのミスじゃな。

北郷ネットの代表がメガロメセンブリアの議員達を取り込んでいるのはアンダーグラウンドの情報で既に知っておったというのに全くの無警戒じゃった。

あのふた月の間に何度も北郷ネットの代表と連絡を取り合い準備をしておいたのじゃろう。

そうでなくては余りにスムーズに事が運び過ぎてる。

そして三学期の内に全ての準備を整え、エヴァが騒ぎ出すのを待つ。エヴァによる被害が自分の元に来たらワシに報告をして注意勧告を要請する。

これが先ず一つ目の計画。

そして再び被害が及べば警告勧告に変える。

ダメ押しにエヴァに直接会い、本人から宣戦布告を聞いたらそれを証拠にしてネットに流す。

計画通り、北郷ネット経由で様々な所に広まり、用意していた議員達に闇の福音復活宣言をさせて、懸賞金復活と懸賞金アップで話題をさらう。

ここまですで2つ目か？

そして大停電の日に襲って来たエヴァを討伐隊にまで誘導して抹殺する。



そしてワシ等が動く前に闇の福音死亡を流し観衆の目を釘付けにする。

あとは勝手に騒ぐからその波に乗って正式に討伐完了報告を議員に発表させる。

正に計画通りに事が運んだじやろうな。

オマケにワシが討伐隊を雇い、討伐させたと報じ、自分から大衆の目を背けさせる。

全く、良く出来ておる。

それにしてもあの時は驚いたものじゃ。

ワシがエヴァが死んだことを知った時には既にネット上では「闇の福音死亡!!」のニュースが飛び交っていた。

証拠映像も一緒に信憑性が高かったからイタズラでは流されなかった。

恐らくエヴァが死んだ瞬間、いや死ぬ前には既に流しておったのじやな。

そうで無くては説明がつかない程早く流れていた。

学園は大停電のせいでネットが確認出来なかったから、こちらの対応は完全に後手へ回った。

停電復旧後にこちらも何とか粘ったが、北郷ネットの情報までは消去出来なかったからそのまま広がり続けた。

事前にファイヤーウォールや電子聖霊防壁を何重にも張っており、侵入出来なかった。

そして時期を見計らい、正式にワシが討伐したと発表してワシを黙らす。

懸賞金を無理矢理渡し、この話は終わりにする。

受け取りを辞退出来ないように、雇った討伐隊と山分けにさせる。金を受け取ったのだから最早言い逃れは出来ない。

正に詰み。

正直ネギ君がこれで9歳とは思えん

むしろワシより経験豊富な年上に思えて来る。

誰かが入れ知恵したのか？

まあ良い。

この話はこれで終わったのじゃから。

学園内でもワシがやったことになっておるから今更蒸し返しても混乱が起きるだけだ。

被害者でもあるネギ君がワシを持ち上げているから最早誰もが疑っていない。

唯一の味方は高畑君だけじゃ。

しかし、彼一人ではこの状況は覆せない。

だから、もう終わったことなんじゃ。

次を考えなくては。

修学旅行で京都に行き、ネギ君には親書を託し関西呪術協会の長、近衛詠春と会わせることになっている。

その際、木乃香に魔法を知って貰い、魔法を覚えさせる計画じゃったがどうなるか？

ネギ君は木乃香とは教師と生徒の関係以外は無いいし、守ってくれるかが疑問じゃ。

契約で一般教師以外の仕事はしないと明言しておるから最低限度は守るじゃろうが、魔法が関係したら守るかが分からん。

むしろ木乃香は修学旅行には参加させるべきでは無い。と言ってくるじゃろう。

さあて、どうしたものかのう……。

## 26 修学旅行？

放課後、俺は学園長から呼び出された。  
次は修学旅行イベントか…。  
イベントの周期短すぎ。

学園長室に入り、学園長の前まで行くと。

学園長が睨んで来た。おーおー、やっぱり恨んでるな？

「如何致しましたか？ 学園長。」

俺は心底分らないような態度を取る。

その態度に学園長の目線が更に鋭くなった。

「よくもやってくれたのう？ ネギ君。」

お主が行動に移るまで何も気付かなかったわい。」

「行動…？ 何のことでしょう？」

あくまで知らぬ存ぜぬを突き通す。

「……………」

学園長と俺はしばらく黙り込んだ。

「まあ良い。もう終わったことじゃ。もうどうしようも無い。」

悲しそうな顔をする学園長。

「何のことは分かりませんでした、分かりました。」

それでも惚ける俺。

そんなに殺して欲しく無かったらその前に自分で始末すれば良かったのに…。

大体、あのまま永久に学園にいたかも知れないエヴァのことを考えたら、逃がすか殺すべきだ。

どっちつかずの態度を取り続けた貴様が悪い。

とりあえずこの話は終わり。

「さて、ネギ君。君には大事な知らせがある。」

やっと本題に入るらしい。

ここまでの無駄な時間は残業代は出るのだろうか？ 出ないだろうなあ…。

「はい、何でしょうか？」

本命は修学旅行についてだが、大穴は教師のクビか？

怒りに任せて俺をクビにするかも知れない。

まあ、別に良いけど。

これでクビになれば後は悠々自適な隠居生活だ。北郷ネットの売上で死ぬまで遊べる。

少し期待していたが

「修学旅行についての件じゃ。」

やっぱり本命か…。

まあ、来ないから大穴だもんな。

「修学旅行：ですか？」

確か修学旅行は京都かハワイの予定でしたね。」

心の中で落胆したが表面は穏やかに聞く。

「うむ、京都が第一候補じゃったんじゃが。先方がかなりイヤがっておつてのう。」

「ではハワイで良いのでは？ 所詮候補ですから。

第二候補のハワイを繰り上げれば良いのでは？」

出来れば俺もそっちが良い。

「いや、ワシとしては是非とも京都にしたい訳があるんじゃないよ。しかし先方がなあ。」

あくまで京都にこだわる爺。

「先方：と言うと、もしや関西呪術協会がですか？」

俺のその言葉に爺が少し驚いたように

「知っておったのか？ ネギ君。」

「ええ、赴任前にこの国の魔法関係については多少は調べましたから。」

素知らぬ顔で答える。

「と言っても知っているのは名前だけで、詳しい勢力図や関係については知りません。」

全部知っているが知らないと答える。

後々面倒になるからな。

「なら話しは早いじゃろう。」

今年は魔法先生が同行すると言ったら修学旅行での京都入りに難色を示してきおった。」

「では私が同行しなければ良いのでは？ 私のクラスは代わりの先生に率いてもらえば良よろしい。」

本当にそうしたい。

修学旅行なんて生徒側からしてみたら楽しいが教師側から見れば地獄だ。

何が楽しくて一日中ガキの面倒見なくてはいけない。

俺の言葉に学園長は

「いや、それは困る。ワシとしてはもうケンカは止めて西と仲良くしたいんじゃない。」

そのための特使としてネギ君には西へ行ってもらいたい。」

原作の時から思っていたけどコレ有り得くない？

だって停戦交渉を見習いに任せるなんて。明らかに相手を下に見ている。

これで停戦出来るなら戦争の九割は無くなるだろう。

「この親書に向こうの長に渡してくれるだけで良い。」

机の上に親書を出してくる。

「一つ確認したいのですが。」

先程から話を聞く限り、先方の意思が出て来ていないのですが、先方も東からの特使は承知済みなのでしょうか？」

一応聞いとく。

その答え次第で行動難度が大きく変わる。

「うむ、既に西の長は承知済みじゃ。」

つまり、俺に選択肢は無い。

「なる程、先方も了解済みですか。」

それを言っただけ黙る。

爺は俺が納得したと思っただろうが、本当はこいつとあの無能を殺してやりたい衝動を抑えているのだ。

「では、頼んじゃぞ、ネギ君。

ただ、道中向こうからの妨害があるかも知れん。彼らも魔法使いである以上生徒達や一般人な迷惑が及ぶようなことはせんじやろうが……。」

その言葉に

「では、もしも妨害して来る輩がいたら、その場合は然るべき対応を心掛けます。」

俺の言葉に爺が反応する。

「然るべき対応とは……？」

爺が睨みつけながら聞いてくる。

前にもこんなことあったな。

「もしも妨害して来る輩がいたら処分するということです。

この親書を届けることは西の長も納得していること。でしたらそれを妨害しようとしてくる者は裏切り者。ならば処分するべきでしょう？」

正論で返す俺に爺は一応反論。

「しかし、ただ妨害して来るだけで処分したらこちらの印象が悪くなるのう？」

「もしもその裏切り者を処分したことに西の長が悪く言って来るのなら、こちらと本気で停戦する気は無いのでしょうか。」

でしたら交渉など無意味です。やはり修学旅行はハワイにすべきです。」

その言葉に学園長も折れたのか

「分かった。良いじゃろう。」

しかし、処分は最終手段じゃ。

それに、生徒や一般人に危害が及びことは許さん。」  
という大甘判定に終わる。

一応の条件は付けたがあってないもの。

「では、特使として京都に行って来ます。話は以上ですか？」

一応木乃香のことも聞いたく。

「うむ、実はもう一つあるのじゃ。」  
爺がもったいぶりやがる。

「木乃香を：守って欲しい。」

その言葉に俺は首をひねりながら

「木乃香さんですか？」

勿論受け持ちの生徒ですから守りますが？」

一般生徒として守ることを確認する。

「いや、一般生徒としては困るのじゃ。」

学園長は一々もったいつけやがる。

「アナタのお孫さんだからですか？」

「いや、確かに孫を守って欲しい思いもあるが、一番の懸念はさらわれる危険があるからじゃ。」

ようやく言ったか

「さらわれる？ 人質にでも取られるのですか？」

学園長の孫なら一応は人質にもなる。

「いや、人質では無く、利用されるじゃろう。」

「利用…とはどうですか？」

学園長は複雑そうな顔をして

「あの子は他人より特殊な立場におつての。」

木乃香は実は西の長の娘なんじゃ。」

驚いた振りをして

「西の長の…？ では西の長とは親戚関係ですか？」

「うむ、西の長である近衛詠春は娘婿じゃ。」

木乃香は魔法関係に関わって欲しく無いと告げられたので、東の長であるワシの所で一般人として暮らしておるのじゃ。」

普通に考えて明らかに間違いだろ？

なんで魔法使いの拠点に預ける。逆効果だろう？

「オマケに木乃香は生まれつき莫大な魔力を持っておる。」

その魔力量はお主の父、ナギ・スプリングフィールドさえも上回る。もしも西の過激派に木乃香が誘拐でもされたら、木乃香は魔力タンクとして利用されてしまう。」

わざわざ解説ありがとう。

だったらこっちで利用すれば良いのでは？

洗脳なりして本人には分からないように利用すれば良い。原作のネギのように。

「つまり、特使と木乃香さんの護衛を同時に行えと？

でしたら難易度が大幅に上がります。

先程から聞くには、木乃香さんには魔法をバラす訳にはいかず、普通を守りながら親書を届けるなど不可能です。

木乃香さんには護衛が着いてはいないのですか？」

刹那のことを聞く。

「いや、最悪木乃香に魔法がバレても構わん。

あちらは木乃香に魔法関係に関わって欲しくは無いらしいが現実的に無理じゃ。いずれはバレる。

だから魔法に関してはい心配いらん。

それと護衛じゃが、勿論木乃香には護衛が着いとる。その護衛は桜咲刹那君じゃ。」



あの役立たずか？

「桜咲ですか？」

しかし、桜咲は木乃香さんとは常に距離を取っているようで護衛には見えませんよ？」

全くだよ。

てめえの正体なんかどうでも良いだろ？

てめえはお友達では無く、護衛として着いて来た癖にうじうじとウザい。

護衛ならどんな理由が有ろうと常にいるべきではないのか？  
学園長も困った顔をし

「うーむ、まあそこは本人に任せよう。護衛は常にしとるし、問題無からう。」

それは鍵を付けたまま車を放置する位問題あるぞ。

「まあ、護衛については刹那君と相談をしとくれ。  
これで話は終わりじゃ。」

ようやく長い話が終わった。

とりあえず今は面倒だが刹那と会うか。

## 27 修学旅行？

修学旅行当日

朝5時半に起きる。

面倒くせえ。何でこんな朝早く起きなきゃいけない？

いくら教員は早めに行かなきゃいけないでもこれは早すぎだろ？

あーあ面倒くせえ。

電車に乗り、集合場所の大宮駅に着いた。

既に教員達は全員いた。

こいつ等何時に起きてんだ？

一応挨拶周りをしとく。上下関係って面倒だよねえ。

うちのクラスのバカ達も殆ど集合している。

「おはようございます。皆さん早いですね？」

「おはようございます。待ちきれなくて始発できちゃいました！」

挨拶はきちんとしているが高いテンションを隠しようが無いようだ。始発から来たって、何時に起きてんだよ。

9時になり、集合時間が訪れる。

「それでは京都市の3A，3D，3H，3J，3Sの皆さん、各クラスの班ごとに点呼をとってからホームに向かいましょう。」

しずなの声がホームに響く。

ていうかクラスの単位おかしくね？

何でA，B，C順じゃないんだろ？

それより何クラスあるんだよ？ Zって有ったわけ？ 一クラス三十人位と考えると一学年780人って凄すぎねえ？  
この少子化の時代によくいるな。

続々と新幹線に入ってく生徒達。

原作とは違い、バラバラな行動をしていないのが救いだ。やっぱり騾は大事だね。

エヴァと茶々丸が死んだのでザジを三班。刹那を五班に加入させるという原作通りにした。

しかし、ここで決定的に違う光景があった。

五班の雰囲気が和やかな事だ。

刹那が木乃香と仲良く歩いている。原作とは違い、刹那も積極的に話しかける。

なぜこうなったかと言うと先週に刹那と話し合い。

最初は護衛として常に側にいるべきと説得したが、刹那が煮え切らない態度を取り続けたので面倒になり、魔法で脳に木乃香と仲直りしろと書き込んだ。

ついでに緊急時には余計な感情を持たず、ただ木乃香を危険から遠ざける。と刻んだ。

これで木乃香の護衛は大丈夫だろう。

余計な感情さえ無ければ刹那は結構使える。あの状態なら普通に人も殺せる。

これで俺は外敵のみを排除すれば良い。刹那の正体による葛藤なんか知るか。

無事新幹線は走り、京都に向かう。

そして車内販売のアナウンスが始まる前に天ヶ崎千草を探す。

いた！ 何か術式を仕込んでる。多分あのカエルだろう。

でも何であんなことしたんだろう。

別にアイツ、親書を手に入れるのが目的では無い筈なのに。

まあいいや、ここでそれも終わるんだから。

周りに誰もいないことを確認して。

「すいません。」

普通に話しかける。

「はい？ 申し訳ありません。車内販売はもう間もなく始まりま…」  
その先は言えなかった。

なぜなら喉にはナイフが刺さっているからだ。

天ヶ崎は突然の事に驚き、体が硬直した。

まさか魔法使いがナイフで襲ってくるとは思ひもなかっただろう。  
その硬直してる隙を狙いナイフを引き抜いて今度は目を貫き、脳を破壊する。

流石に脳を破壊されたから死んだらしくグッタリと倒れ込む。

死んだことを確認すると直ぐに転移魔法で死体を飛ばす。

多分太平洋のどこかに浮かんでいる。そのまま魚に食われるだろう。  
残った血痕は魔法で洗い流す。

本当！ 魔法って便利だね！

一番困る死体処理もなんなくクリアだ。

そのまま何食わぬ顔で自分の席に座る。

車内販売のカーポートだけが残り販売員が消えるというミステリーが起きたが、問題無く新幹線は京都に着いた。

一端ここで切ります。

## 28 修学旅行？

京都に着いた。

先ずは日程通りに清水寺に向かう。

そして原作の見開きにあった記念撮影だ。

原作とは違い、全員キツチリ並んでる。みんな笑顔だが。

後は普通に観光だ。

清水寺を見学して、音羽の滝や恋占いの石などを原作通り楽しんでいる。

天ヶ崎を事前に殺しておいたからトラブルも無く、普通に清水寺観光は終わった。

ホテル嵐山に着いた。

全員ロビーに集合して部屋のキーを渡す際に警告する。

「修学旅行でハメを外すなどとは言いません。

大事な思い出になりますからそれなりに騒ぎたいでしょう。私だって今日ぐらいは少し騒ぐ程度なら目をつむります。

しかし、ハメを外し過ぎて他のお客さんや他の階にまで騒ぎが聞こえることは許しません。

もしも苦情が一件でも出たら、明日以降の修学旅行はホテル内でのビデオ学習にします。

一切外には出しません。明日から回る予定の場所をビデオで見るだけで学園に帰ります。

そのことをお忘れ無く。」

その宣言を聞いて他のクラスは「本当かよ」と脅しとしか感じてないが、俺のクラスは全員信じた。

何故なら今まで俺は宣言して来たことは全て実行して来たからだ。これである「ラブラブキッス大作戦」と言うふざけた祭りや、バカ騒ぎはしないだろう。

主に騒ぐ奴らは俺のクラスだけだからな。

自分の部屋でくつろぐ。

風呂は生徒達の入浴時間後に入る。ゆっくり浸かりたいからな。そう思ってマツタリとしていたらホテル内に侵入者が現れた。事前に結果を張ってあるので簡単に分かる。

ホテルの外で待っていると、黒い小さな影が何かを抱きながら逃走した。

なるほど、あの犬が千草の遺志を継いだのか。まあそうだろう。月詠はこんな面倒なことはしないだろうし、てっきりフェイトが来ると思って警戒してたのに。

まさかアイツ帰った？

雇い主は死んだし、契約は解除されるからもう帰ったかな？

だと助かるんだがな。

ま、とりあえず今は罨にはまった小太郎に感謝するか。

ワザと結界に穴を開けて侵入させ、木乃香に化けさせた自動人形をさらってくれたんだから。

あの自動人形は本人の性格もトレースしてくれるけど、魔力まではトレースしないからさらっても意味が無い。

ちなみに北郷ネットで販売している自動人形は姿形が同じになるだけで応答機能は無い。

ただ、すごく本人に似ている人形になるだけだ。

先回りしてあのやたら鳥居が多い神社の前に待つ。

お、来た。

おーおー、機嫌良さそうだねえ。

そりゃあそうか、追っ手が今までいなかったもんねえ。バレなかったと思ってるんだろう。

それもここで終わりだ。

突然前に現れた俺に驚く小太郎。

「な、何やお前!? もしかして…」

ダダダダターーーン!!!!

「ギャーーーー!!!!」

何か喋り掛けて来やがったから、氷属性の魔法の矢を百本食らわせた。

自動人形ごと粉々になったな。

とりあえず終わったからこのまま親書を長に渡しに行こうとしたら。

「どうもー。おたく強いんどすなあ。

是非ともウチと一勝負お願いしますー。」

めんどい奴が来た。

てつきり刹那が来てないから来ないかと思ったら、別に剣士じゃ無くても良いのかよ?

「ではー勝負開始ー。」

と言っていきなり攻めて来やがった。

とりあえずカン卦法で体を強化して避ける。

それで更に面白くなったのか色々技を出してくるが、全部無効にしたり避けたりした。

何か面倒になってきた。

この辺関西呪術協会の敷地内だし、決めるか。

月詠が雷光剣かまして来たからカウンターで雷の暴風を食らわす。流石に範囲が広すぎて避けられなかったらしく、モロに食らい、あの悪魔の群れのように吹き飛ばされた。多分粉々になって死んだ。

周りも吹き飛ばされてボロボロだが。

周りには木造建築しかなかったので建物もあらかた吹っ飛ばされた。ま、良いか。形有るものいずれは壊れる。壊れる時期が早まっただけだ。

本山に向かう。

原作のような出迎えは無かった。

巫女さんの行列見たかったなあ。

どうやら俺が吹き飛ばした家屋の修理と誤魔化しにみんな出払っているようだ。

自業自得か。

大広間にぼつんと一人で待つ俺。

座布団も無いのかよ。そこまでムカついたのか？

しばらく待っていると

「お待たせしました。」

やっと来た。

久しぶりに見た顔は以前より顔色が悪そうだ。ひょっとして俺のせい？

「お久しぶりです。近衛詠春様。

以前会った時より少し顔色が優れませんが、お元気でしたでしょう



か？」

頭を下げながら聞く。

「ええ、色々ありましてね。つい先程とか。」

やっぱり俺か。

「そのことについては申し訳ありませんでした。」

何分、手練に襲われまして、一撃で決めるために大技を使いました。」

ここでまた頭を下げる。

「しかし、以前私がした注進をお聞き入れされていたらこんな事態にもならなかったのですがねえ。」

全部貴様の無能が招いたと非難する。

その皮肉が通じたのか顔を悔しげにする。

「まあ、終わったことです。」

そんなことよりも。」

親書を取り出し。

「関東魔法協会の長、近衛近右衛門からの親書です。」

どうぞ、お受け取り下さい。」

親書を渡し、とりあえずのミッションクリア。

もう遅いから泊まるよう言われたが断り、直ぐに山を降りた。

もしフェイトが無いと思うけど、攻めて来たら面倒だ。

俺はあの無能と一時も一緒なんて御免だ。

何か面倒なことを押し付けて来るかもしれない。

結局フェイトは現れなかった。

やっぱり契約主が死んだもんな。

別にそこまでスクナが見たかった訳でも無さそうだったし、たんに暇つぶしだったんだろう。

その後は普通に修学旅行だった。

ホテルでは俺の脅しが効いたのか、31Aも普通に修学旅行らしく騒ぎ、時々新田に無断での部屋移動が見つかりロビーに正座してた奴もいたけど、苦情は無かったのでビデオ学習は無かった。

修学旅行の日程は終わり、新幹線で普通に帰った。

後半何にも無かったな。やっぱり厄介事は早めに終わらせるのが一番だな。

木乃香も刹那と仲直り出来たし、万々歳だろう。

## 29 学祭前

修学旅行が無事終わり、とりあえずの日常だ。

こっからのイベントは大体無視だ。

まず俺は生徒達とそこまで親密な関係を築いていないから学祭前のイベントは起きようが無い。

弟子入りなんかする必要無いし、佐々木まき絵を慰めることなんか面倒だ。

エヴァに弟子入りなんか不可能だ。だってアイツ死んでるもん。

図書館島探索なんか起きる訳が無い。

俺はナギの隠れ家なんか行って無いから学園の地図も手に入れてない。

学祭前の一番デカイイベントはヘルマン襲撃だ。

しかしそれは有り得ない。

何故ならヘルマンを封印したビンはあの時俺が確保した。

原作ではどこにいったか分からなかったが、救助隊が来る前に探したら普通にあった。

現在、そのビンは何重にも封印や結界を掛けたから出られない筈。少なくとも俺が死ぬまでは。

何かデカイイベントも冷静に対処すれば簡単だな。

なんで他のオリ主は真面目に戦うんだろ？

勝てれば何だって良いだろう？

### 30 学園祭

学園祭が始まった。

この学園は何を考えているのだろうか？

学生が着るには明らかに露出し過ぎな服装や、あまりにリアル過ぎるかぶり者。

教育委員会は何をしている。

俺の前の世界での学生生活では学園祭とかでハメを外してコスプレする奴らもいたけど、ソッコー教師から注意されて直ぐに戻された。ここは治外法権区域か？

だとしたらすげえな。

ここは日本であって日本ではない。

まるで独立国か公国だな。

ちなみにうちのクラスの出し物は初めからホラーハウスに決まった。流石に俺の前でボツタクリバーは開けなかったようだ。

準備期間が結構あったから原作とは違い、夜学園に残らずホラーハウスは完成した。

なんかいつの間にか3-Aが模範的なクラスになったな。原作から考えるとあり得ない展開だな。

ちなみにこの学園祭で大した問題は起きないだろう。

超 鈴音と葉加瀬聡美は死んだ。

何故か学祭直前に研究棟が爆発した。

調査の結果、爆発の原因は研究室で危険な実験を行い、その操作を失敗して爆発した。

それが正式発表だ。

爆発の規模はそれ程大きくなく、両名がいた研究室のみが大破した。死体の損害が激しく、詳しいことは分からなかった。

もしも爆発前に殺されていたとしても分からない程バラバラになってしまっているのだから。

その後、葉加瀬聡美の研究室を調べたら、とんでもない量の戦闘ロボットが発見された。

そして、超 鈴音の自室のパソコンからはクーデターを計画しているファイルも発見された。

情報を調べた結果、超 鈴音、並びに葉加瀬聡美は学園内でクーデターを画策し、学園祭で実行しようとしていた事が分かった。

事の重大性を考えた学園側は、超 鈴音と葉加瀬聡美は海外に留学したとして処理した。

クラス員達も納得したのか、混乱は最小限だった。

学園祭前ということもあって準備に忙殺され、二人のことはあまり気にしなかった。

との結末だ。

アイツ等が魔法をバラして未来をより良くするとか計画していたけど、魔法バラしたら間違い無く戦争起きるから未来があるかすら分からない。

バチカンが魔法使いの存在を認める訳無いし、また魔女狩りに似た事が始まるのがオチだろう。

魔法使いとの戦争なら核だって使い放題だ。

何せ世界が違うんだ。

放射線による被害なんか考えなくて良い。

世界中にある余った核兵器の放出セールが始まるだろう。

そうなれば火星移民前に人類がかなり滅ぶ可能性だってある。

アイツその事を考えていたのか？

考えていただろうが止められなかったのか？

だとしたら残念だな。

俺がいる世界でそんなことは許さない。

原作ではうやむやになったが、俺はうやむやになどしない。

だから爆発なんて事故が起きたのだ。

俺、悪くないよねえ？

### 31 ストレスからの解放(終)

学園祭は例年通り盛り上がり、無事終了した。

武術大会は開催されたが、賞金アップのための買収者が死んだから賞金は十万のまま増えず。

そこその盛り上がりは見せたが、結局は普通の武術大会に終わった。

ちなみに優秀者はクーフエイ。

魔法関係者が参加しない限り最強だったため、圧勝に終わった。

学園祭が終わり、本来なら魔法世界編に突入するが、俺はそんな面倒なことはしない。

別に俺が死んだ後にどうなるかが知ったこっちゃねえ。

普通に一年が過ぎ、遂に卒業式を迎える。

31Aの奴らは最終的には結構マシになり、最後の期末では学年三位を獲得した。

問題行動も激減して一気に模範生だ。

高等部になったらどうなるかは知らんが。

俺は無事修業が終わり、魔法世界に帰る。

そして魔法世界でナギ・スプリングフィールドに恨みを抱いた者に殺されたと死亡偽装をして、現実世界に帰って来た。



ようやく日常が帰って来た。

やはりこっちの世界の方が色々に住みやすい。

それに、魔法世界は、ていうか旧世界は「完全なる世界」が滅ぼすんだろ？。

だったらこのまま現実世界にいる。

北郷ネットで儲けた金があるから生活に困らないし、北郷ネットはこっちの世界にも進出しているから問題無い。

大体、何で面倒な事に首突っ込まなくてはいけない？

一時期住んでたけど別に何とも思わない。

勝手に頑張ってよ。

俺は一切干渉しない。

こっちの世界でニート生活だ。

それに俺まだ十歳だぜ？

子供に戦わせんなよ。

ちなみに学園長や高畑は魔法世界に異動にした。

完全なる世界のことは代理人を通じて伝えたから頑張って下さい。

正義の味方何でしょう？

そっちが主人公で頑張ってくれ。俺はパスだ。

大分遅れたが、今から青春だ。

とりあえずどうしよう？

ちゃんと高校行きたかったからまた学生やろうかな？

この世界なら俺天才だし。

### 31 ストレスからの解放（終）（後書き）

沢山の感想ありがとうございました。

何とかこの「ネギ？スプリングフィールド」をペースを保ったまま終わらせることが出来ました。

皆さんのありがたいご感想のおかげです。本当にありがとうございました。

次回作の日本魔改造は現在少しずつ執筆中です。

こちらの方も見ていただけたら幸いです。

ちなみにタイトルは「明治？マジ！？」です。

小説家になろうにて連載予定です。

近日中に投稿します。

内容としましては宣言通りの日本魔改造なのでリアル感はありません。

戦闘シーンは前半はほとんど無く、開発チートばかりです。

リアルな戦記物が好きな方は止めておいた方が懸命です。

ちなみに主人公の特性上、卑劣なことや史実の有名人が死ぬ事も多数あります。

また、主人公は戦史の知識がほとんど無いため政策や戦略は他の二次小説や戦記小説を多々参考にします。

主人公は戦史マニアでは無いためこうなりました。

様々なヒドい点がありますがそれでも読んでみたいという方は是非

読んでやって下さい。

長々と説明が続きましたが、改めてこの作品を読んでくださった方々、誠にありがとうございます。

浦波。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1284p/>

---

ネギ？ スプリングフィールド

2011年8月2日17時21分発行